黒谷川宮ノ前遺跡

1993
徳島県教育委員会

序　　文

本書は、徳島県教育委員会が、黒谷川中小河川改修工事に伴う事前調査として、昭和63年度平成元年度に発掘調査を実施した黒谷川宮ノ前遺跡の発掘調査報告書であります。

黒谷川宮ノ前遺跡は、昭和59年度以降継続して調査を行っている黒谷川郡頭遺跡の上流約1kmの地点で新たに確認された古代からの中世にかけての遺跡であります。今回の発掘調査においては、黒谷川の流路内の堆積層から墨書土器や古代律令制下における木製の祭祀遺物が多量に発見されました。

このような調査成果をまとめた本書が、今後の研究資料として活用されますとともに、埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただく一助となれば幸甚です。

最後になりましたが、調査に際しまして寄せられました関係各位のご指導、御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

徳島県教育委員会

教育長　近藤通弘

例　　言

1．本書は黒谷川中小河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査徳島県土木河川課の委託を受けて教育委員会文化課が実施した。

3．調査は２次に亙り、第Ⅰ次調査は昭和63年９月６日から11月２日、第Ⅱ次調査は平成元年６月３日から平成２年１月31日の間実施した。

4．収録した資料のうち現場での測量は調査主任・調査員が分担し、遺構の製図、遺物の実測は大西浩正、片山敦子、山本愛子が行い、写真撮影、本文執筆及び編集は大西が行った。また重松麻里子、森清治、明石辰也各氏にはそれぞれの作業において協力を得た。

5．本書で用いた絶対高は海抜を示す。方位はすべて磁石である。

6．土色の判定に際しては、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帳』1967によった。

7．fig. ２の地形図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「大寺」を転載したものである。

8．今回の調査において下記の方々よりご教示を受けた。

足立順司、伊藤健司、岡内三眞、勝浦守康、佐藤達雄、菅原康夫、長谷川賢二、高島芳行、水野正好

本 文 目 次

序 文

例 言

Ⅰ 黒谷川宮ノ前遺跡周辺の地理的・歴史的環境 …… 1

1．地理的環境 …… 1

2．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1

Ⅱ 調査に至る経緯と経過 …… 7

1．調査の経緯 …… 7

2．調査体制 …… 8

3．調査日誌抄 …… 9

Ⅲ 第Ⅰ次調査の成果 …… 15

1．基本層序 …… 15

2．出土遺物

(1) 中世の遺物 …… 16

(2) 第10層出土遺物 …… 16

(3) 第11～14層（第1包含層）出土遺物 …… 18

(4) 第15、16層（第2包含層）出土遺物 …… 27

(5) 左岸側試掘坑出土木製品 …… 30

Ⅳ 第Ⅱ次調査の成果

1．基本層序 …… 32

2．出土遺物 …… 33

(1) 10K－19グリッド土器溜り出土遺物 …… 33

(2) 上層（青灰色グライ層）出土遺物 …… 33

(3) 第19層出土遺物 …… 35

(4) 第21、22層（第1包含層）出土遺物 …… 35

Ⅴ 小 結 …… 39

挿 図 目 次

fig. 1　黒谷川宮ノ前遺跡周辺の遺跡 …… 2
fig. 2　調査区位置図 …… 11
fig. 3　グリッド配置図 …… 13
fig. 4　第Ⅰ次調査基本土層図 …… 15
fig. 5　第5～10層出土土器実測図 …… 16
fig. 6　第5～10層出土遺物実測図 …… 16
fig. 7　第10層出土遺物実測図 …… 17
fig. 8　10m－1グリッド遺物出土状況 …… 18
fig. 9　第1包含層出土土器実測図 …… 19
fig. 10　第12層出土人形実測図 …… 21
fig. 11　第12層出土遺物（斎串）実測図 …… 22
fig. 12　第13、13'層出土遺物（斎串）実測図 …… 23
fig. 13　第13、13'層出土遺物（刺串）実測図 …… 24
fig. 14　第13、13'層出土遺物実測図 …… 25
fig. 15　第15、16層出土遺物（斎串）実測図 …… 26
fig. 16　第16層出土遺物（棒状祭祀具）実測図 …… 28
fig. 17　第16層出土遺物実測図 …… 29
fig. 18　10m-グリッド付近試掘坑出土遺物実測図 …… 30
fig. 19　第Ⅱ次調査基本土層図 …… 32
fig. 20　10k-19グリッド土器溜り出土遺物実測図 …… 33
fig. 21　上層（青灰色グライ層）出土遺物実測図 …… 34
fig. 22　第19層出土遺物実測図 …… 35
fig. 23　第21層上層出土遺物（斎串）実測図 …… 36
fig. 24　第22層出土遺物（人形）実測図 …… 36
fig. 25　第21、22層出土遺物実測図 …… 37
fig. 26　第22層出土遺物（棒状祭祀具）実測図 …… 38

表　目　次

表1　徳島県の郡名対照表 ……4
表2　第5～10層出土土器観察表 ……43
表3　第1包含層出土土器観察表 ……43
表4　10k-19グリッド土器溜り出土土器観察表 ……45
表5　上層（青灰色グライ層）出土遺物観察表 ……46

写　真　図　版

PL. 1　（上）第Ⅰ次調査左岸側調査風景　（下）第Ⅰ次調査左岸側完成掘状況
PL. 2　（上、下）第Ⅰ次調査第1包含層土器出土状況
PL. 3　（上、下）第Ⅰ次調査第1包含層土器出土状況
PL. 4　（上、中、下）第Ⅰ次調査第1包含層上層斎串出土状況
PL. 5　（上、下）第Ⅰ次調査第1包含層斎串出土状況
PL. 6　（上）第Ⅰ次調査第1包含層鉾形出土状況　（下）第Ⅰ次調査第1包含層斎串出土状況
PL. 7　（上、中）第Ⅰ次調査第1包含層斎串出土状況　（下）第Ⅰ次調査第2包含層棒状祭祀具出土状況
PL. 8　（上）第Ⅰ次調査第2包含層棒状祭祀具出土状況　（下）第Ⅰ次調査第2包含層櫂状木製品出土状況
PL. 9　（上、下）第Ⅰ次調査第2包含層曲物出土状況
PL. 10　第Ⅰ次調査出土土器
PL. 11　第Ⅰ次調査出土土器、石器、鉄器
PL. 12　第Ⅰ次調査第1包含層出土木製祭祀具
PL. 13　第Ⅰ次調査第1包含層出土人形、縄、檜扇（左：通常　右：赤外線カメラ使用）
PL. 14　第Ⅰ次調査第2包含層、左岸側試掘坑出土木製祭祀具
PL. 15　第Ⅰ次調査第2包含層出土櫂状木製品、曲物
PL. 16　（上）第Ⅱ次調査調査区全景　（中）人形出土状況　（下）横櫛出土状況
PL. 17　第Ⅱ次調査上層出土土器

Ⅰ．黒谷川宮ノ前遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1．地理的環境

黒谷川宮ノ前遺跡は、吉野川が下流域に形成した楔形の平野部の北縁部に所在し、北には、讃岐山脈を控える。この讃岐山脈の南に沿っては、日本最大の活断層「中央構造線」が延びる。古来より、吉野川は暴れ川であり、人々に大きな被害を及ぼす一方、それがもたらす肥沃な土壌は、近世の藍作にみられるように農業に大きな恩恵を与えてきた。その流路は、たびたび変化を繰り返し、現在のように広く直線的になったのは、大正から昭和にかけての大改修工事以降のことである。今日、北に偏った旧吉野川流路は、従前の川筋の名残を残すものである。黒谷川宮ノ前遺跡が営まれていた古代には、鳴門方面から吉野川系統の流路を使っての水上交通が重視されていたことが想定され、当該地は官道南海道が国府、讃岐方面に分岐する重要な地であった。

現在本遺跡周辺は、水田・蓮根畑などが広がるのどかな農村風景を呈するが、四国縦貫自動車道の建設などを契機に開発が進みつつある。

2．周辺の遺跡と歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

原　始

板野町内の旧石器時代の遺跡は、羅漢平山など讃岐山脈南縁の台地から遺物の出土が報告されているが、遺跡としての調査例はない。人々の営みが遺跡のなかで確認されはじめるのは、縄文時代から弥生時代にかけてからである。今回の調査と同様に黒谷川中小河川改修事業に伴って調査が進められている黒谷川郡頭遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭期にかけて、朱の精製を行なった特異な集落として知られている。(1)(2) この遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期新段階にかけての遺構・遺物も検出されており、平野部での集落形成は、少なくともこの時期までは遡り得る。(3)(4)また、平成２年度に徳島県埋蔵文化財センターによって調査された黒谷川宮ノ前遺跡では、弥生時代後期と古墳時代初頭期の水田跡・灌漑用の溜池等の遺構が検出されている。(5)

古墳時代になると、町北側にある丘陵上に多数の古墳が造営されている。近年、四国縦

貫自動車道の建設に伴って調査された蓮華谷古墳群は、古墳時代初頭のレキ床をもつ古墳や、古墳時代後期の横穴式石室が造営されている。(6) 板野町東端には、全長65mの規模をもつ古墳時代中期の前方後円墳である愛宕山古墳が構築され、(7) 近接地には結晶片岩を石材に用いた箱式石棺を主体部にもつ諏訪神社古墳が所在する。板野町の中心部近くには、積石塚であったと考えられる阿王塚古墳や横穴式石室を内部主体としていた大塚古墳がある。(8)

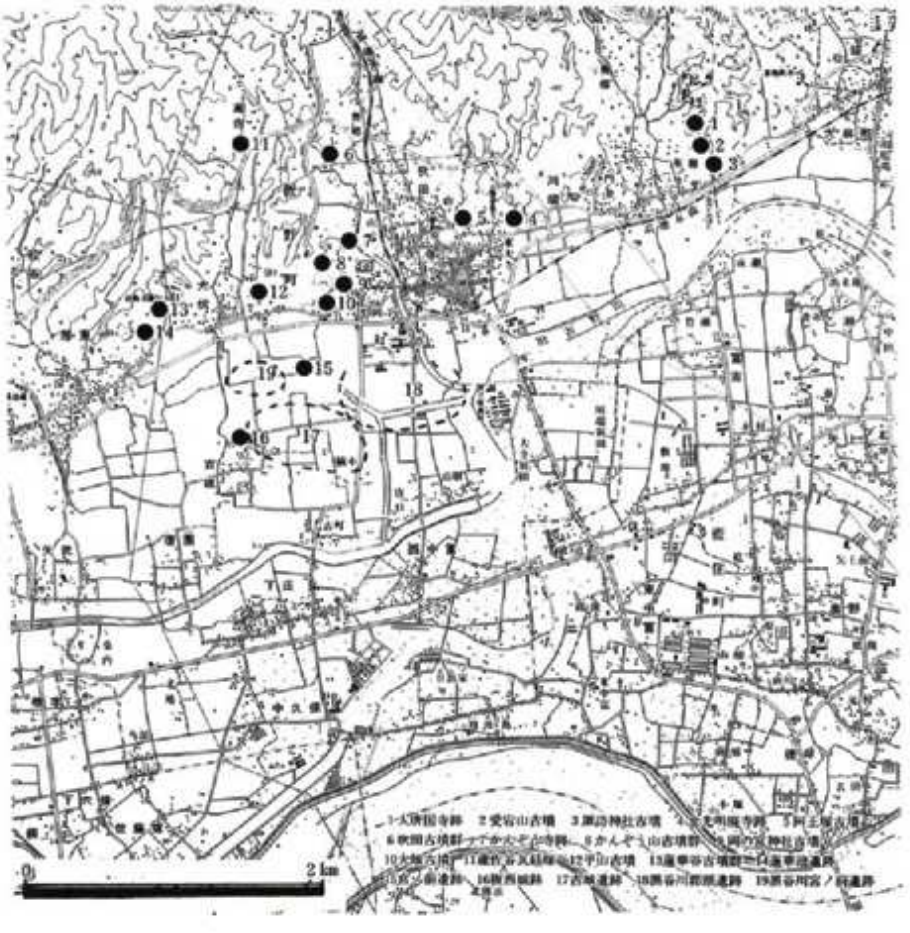


fig. 1　黒谷川宮ノ前遺跡周辺の遺跡

また本遺跡の真北にあるかんぞう山には、既に破壊が進んでいるが、箱式石棺を内部主体とする1号墳をはじめ、10基前後の古墳から構成されていたかんぞう山古墳群がある。(9) その北側には吹田古墳群や、西方に600m余り離れた場所には平山古墳なども造営されていたが、大半が開発に伴い消滅している。(10)(11)

古　代

現在の板野町大寺周辺は、律令体制下の郡の役所である「郡衙」の有力な候補地と考えられている。加えて、延喜式に記載される南海道の「郡頭駅」も、板野町大寺に「郡頭」の字名が残ることを根拠に、その近辺に推定されてきた。(12)

四国八十八箇所霊場の三番札所金泉寺付近は、白鳳から天平期にかけての瓦が出土したことから金光明廃寺の所在が指摘されている。平安時代に、かんぞう山北東側にはかんぞう寺、川端には大唐国寺がそれぞれ建立されていた可能性が強く、(13) また蔵佐谷には平安時代後期の経塚が確認されている。

また、黒谷川宮ノ前遺跡（本調査区の西方400m余りの地点）では、平安時代中期から後期の遺構・遺物が検出されている。(14)

中世以降

最近まで板野町内の中世以降の遺跡は皆無であったが、本遺跡周辺で大規模な調査が開始されるにつれ、序々に知られるようになってきた。黒谷川の北側に一帯に拡がる宮ノ前遺跡は、中世を通じて営まれた集落であり、溝・土壙・建物跡などが検出されている。一方、黒谷川の南には1582年に土佐から進軍した長曽我部氏によって落城した板西城跡との関連が考えられる古城遺跡が所在する。宮ノ前、古城両遺跡では、近世以降の水田跡が多数検出されている。

(2)　歴史的環境

「板野」の地名が初めて文献に登場するのは、藤原宮SD145出土木簡に「板野評津屋里猪脯」としてであり、「郡」ではなく、それ以前の行政単位である「評」で記載されている。平城京出土の木簡では、「板野郡井隈郷、田上郷」等が記載認められる。(15) 古代の板野郡の範囲は、現在の行政区分で板野郡・鳴門市・徳島市の一部の広い地域に及ぶものであった。

当時は、官道「南海道」は和歌山から加太、淡路島を経て撫養（現鳴門市中心部）へと渡り、西進して石濃・郡頭河駅を通って、讃岐の引田駅へと続いていた。[16] 石濃駅は、現在の鳴門市大麻町大谷付近に、郡頭駅は、前述したように板野町大寺付近が推定地とされている。南海道は阿波国府を通過していないため、郡頭駅は国府に向けての分岐点であったと推定され、国府に次ぐ重要な地であったと推測される。また、必然的に郡頭駅周辺が板野郡の中心地であった可能性も高いと考えられ、郡衙の所在地としてもクローズアップされる。

平安時代中期に編集された延喜式や和名抄までは「板野郡」の存在が確認されるが、鎌倉時代に作られた東鑑では「坂東郡」「板西郡」に分けての記載がされており、この頃行政区分に変化があったようである。

現在の徳島県は、律令体制下の阿波国の枠組みの延長線上にあり、郡名もその当時から引き継ぐものである。（右表）各郡の中心たる郡衙の所在地については、地名研究などから推定されてはいるものの、発掘調査によってその所在地が既に確定されたものはない。

現在最も状況証拠が多いのは名方東（名東）郡衙推定地とされる徳島市庄遺跡である。昭和58年度の県教育委員会の調査では、平安時代中期を中心とする掘立柱建物跡や井戸、水路などが検出され、人形・斎串・鳥形・剣形・舟形など木製祭祀遺物や銙帯金具である巡方など官衙色の濃い遺物が多数出土している。加えて庄官の名称である専当職を示す「賀専当」や現在も当該地周辺の名称となってい

六国史	延喜式	和名抄	東鑑	現在
阿波	阿波	阿波	阿波	阿波郡
麻殖	麻殖	麻殖	麻殖	麻植郡
板野	板野	板野	板西	板野郡
			板東	鳴門市
名方	名方東	名東	名東	徳島市 名東郡
	名方西	名西	名西	名西郡
美馬	美馬	美馬	美馬	美馬郡
	三好	三好	三好	三好郡
勝浦	勝浦	勝浦	勝浦	徳島市 小松島市 勝浦郡
那賀	那賀	那賀	那賀	小松島市 阿南市 那賀郡
			海部	海部郡

表1．徳島県の郡名対照表
※菅原康夫「日本の古代遺跡徳島」より転載

る加茂名ともつながる「加毛（かも）」の書かれた墨書土器など文字資料も伴う。(17) その後の徳島市教育委員会の調査でも、遺構・遺物に官衙的な要素がみられる。(18)

県南部の那賀郡の郡衙は、阿南市宝田町隆禅寺周辺が「郡」の小字名を根拠に推定されてきた。隆禅寺は、白鳳時代に建立された「立善寺」につながり、周辺からは白鳳時代から平安時代にかけての瓦をはじめとする遺物が多数採取されてきた。(19) 平成２～３年度にかけて県教育委員会は、隆禅寺北500ｍにある阿南工業高校体育館建設に伴って調査を実施し、柱穴や溝などを確認している。大量に出土する瓦は、当然立善寺の関連遺構であることを物語っているが、寺院としての位置付けのみならず、那賀郡衙との関連も今後検討する必要がある。(20)

県内の郡衙以下の行政拠点の調査は、まだ手がつけられたばかりであり、当時の歴史的環境を示すものは、数少ない。黒谷川宮ノ前遺跡周辺に推定される板野郡衙・郡頭駅は、阿波国の表玄関というべき位置を占めているだけに畿内との関連が深いことも考えられ、その資料はきわめて重要であろう。

註

(1) 菅原康夫「黒谷川郡頭遺跡Ⅱ」　徳島県教育委員会　1987

(2) 大西浩正「黒谷川郡頭遺跡Ⅴ」　徳島県教育委員会　1990

(3) 「黒谷川郡頭遺跡（Ⅶ次調査）現地説明会資料」　徳島県教育委員会　1991

(4) 「黒谷川郡頭遺跡（Ⅷ次調査）現地説明会資料」　徳島県教育委員会　1992

(5) 「四国縦貫自動車道建設に伴う黒谷川宮ノ前遺跡発掘調査現地説明会資料」　㈶徳島県埋蔵文化財センター　1990

(6) 「四国縦貫自動車道建設に伴う蓮華谷池遺跡（Ⅰ）蓮華谷古墳群（Ⅱ）発掘調査現地説明会資料」　㈶徳島県埋蔵文化財センター　1990

(7) 森浩一「徳島県板野郡愛宕山遺跡古墳」『日本考古学年報』15　1967

(8) 小林勝美「原始」『板野町史』　1971

(9) 「韓崇山古墳群実績報告書」　板野町教育委員会　1990

(10) 天羽利夫、岡山真知子「徳島の遺跡散歩」　1985

(11) 菅原康夫「日本の古代遺跡　徳島」　1988

(12) 服部昌之「阿波国」『古代日本の交通路』　1978

(13) 「阿波の古代寺院」　徳島県博物館　1974

(14) 前掲の註 (5)

(15) 松原弘宣「四国関係木簡の紹介」『古代の地方豪族』 1988

(16) 前掲の註 (12)

(17) 「庄遺跡（徳島大学蔵本団地地区体育館地点）現地説明会資料」 徳島県教育委員会 1983

(18) 「第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る ―最近の発掘調査―」 徳島市教育委員会 1986

(19) 天羽利夫 「古代」『阿南市史』 1987

(20) 「隆禅寺跡遺跡現地説明会資料」 徳島県教育委員会 1991

Ⅱ．調査に至る経緯と経過

1．調査の経緯

黒谷川宮ノ前遺跡は、黒谷川中小河川改修事業に伴う事前の試掘調査で発見された遺跡である。黒谷川流域では、すでに弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡である黒谷川郡頭遺跡が周知されており、遺跡が所在する可能性の高い地域と考えられてきた。予想にたがわず、昭和63年5月に河川工事用杭NO10付近で試掘調査を行なったところ、現在の地表面から5m余りの下層から木製祭祀遺物や墨書土器が検出された。この試掘調査の成果をもとに、周辺一帯に、平安時代中期頃の木製品を伴った良好な包含層が拡がっていると判断し、ただちに県土木部河川課、鳴門土木事務所と協議のうえ同年度に本調査を実施する運びとなった。

昭和63年度は、当初6月から年度末まで黒谷川郡頭遺跡の第Ⅴ次調査および整理業務を計画していたため、調査対象地の暫定掘削を行なう秋以降に工事と並行して調査を行なうこととなった。昭和63年度は、NO9＋50mからNO10付近を対象に調査を実施した。まず、流路を挟んで右岸（約130㎡）については9月6日から9月16日までの10日間で調査を完了し、つづいて、左岸（約200㎡）の調査に10月1日からの約1ヶ月間をあてた。この結果中世に堆積した分厚い青灰色のグライ層の下に、多量の木製祭祀具を含む平安時代の遺物包含層が存在し、その包含層が大きく2時期に分けられることが判明した。また斎串をはじめとする律令祭祀具が多数出土したことから、官衙関連遺跡があることがにわかにクローズアップされることになった。

平成元年度は、当初昭和63年度調査区の西に隣接する部分を調査対象としたが、本事業に先行して調査区対象地を横断して県道バイパスの橋梁が設けられることになり、その部分のみ別事業として調査を実施した。ここでは、平安時代中期から後期にかけての堰跡が検出された。橋梁部分の調査に引き続いて、平成元年6月に本事業の調査を開始したが、夏期は地下水位が高く、標高0m以下の調査は困難をきわめ、やむなく調査を一時中断し、秋から冬の渇水期に調査の延期を余儀なくされた。同年11月に調査を再開し、2月28日までの間調査を実施した。結果的には、前年度より地下水の水位が高く、包含層を完掘できないまま調査を終えることとなり、遺跡の核心に触れることはできなかった。

調査方法は、現在の河川敷で包含層の深度も極めて深いことを考慮し、、5m前後のグ

リッドを設定して、層位ごとの出土遺物の選別して取り上げるようにした。

2．調査体制

昭和63年度

総括	課長	三舟　侑司
	課長補佐	岡野　嘉夫
	文化財保護班長	河野　良昭
	社会教育主事	後藤　忠雄
庶務	庶務係長	天野　尊温
	事務主任	大八木芳子
調査	主事	大西　浩正
担当	文化財調査員	早渕　隆人・扶川　道代・白木　宏治・片山　敦子

平成元年度

総括	課長	三舟　侑司
	課長補佐	篠原　征治
	文化財保護班長	木村　泰彦
	社会教育主事	羽山　久男
庶務	庶務係長	天野　尊温
	事務主任	大八木芳子
	主事	竹岡　正雄
調査	社会教育主事	福家　清司
担当	主事	大西　浩正
	文化財調査員	片山　敦子・奈賀　哲人・竹内　正治・藤本　豊春・山本　愛子・大村　祥之

3．調査日誌抄

＜第Ⅰ次調査＞

昭和63年9月6日　河川工事用杭NO9＋50～NO10にかけて旧河道の右岸部分について調査を開始。基準杭打設。

9月7日　調査区西端にテストトレンチ設定し、基本層位を把握する。

9月9日　各グリッドを一斉に掘り下げ。先行して調査を開始した9Ⅰ－8グリッドを湧水層直上まで掘り下げる。包含層下層から斎串・加工の加わった木片が出土する。

9月13日　各グリッドで包含層の掘り下げを行い、斎串等の木製品が多数出土する。

9月16日　各グリッドで湧水層まで掘り抜く。湧水層まで遺物の混入が認められたが、著しい湧水のため調査続行を断念し、即刻埋め戻しを行なう。

10月1日　河川工事用杭NO9＋50～NO10の旧河道左岸部分について調査区を設け、基準杭を打設する。

10月4日　調査区の表土除去を開始。

10月13日　遺物包含層に到達。斎串をはじめ多量の木製品出土。

10月15日　遺物包含層下層からも木製品が出土。実測、取り上げ作業に追われる。

10月18日　湧水層直上で掘り下げを中止し、土層図作成に取りかかる。

10月25日　調査区西端部分に10m－1，2グリットを設定し、包含層掘り下げを開始する。遺物の密度がきわめて高い。

10月31日　10m－1，2グリットの遺物包含層を完掘。写真撮影、実測作業を並行して実施する。

11月2日　土層図を作成し、第Ⅰ次調査を完了する。

<第Ⅱ調査>

平成元年6月3日　調査開始。調査対象地の重機掘削に着手。

6月6日　重機による掘削と並行して調査基準杭の打設。

6月12日　グリッド設定が完了。掘り下げ作業を開始する。

6月15日　10mn－11～13グリッドで包含層まで掘り下げが進むが、前年度調査に比べ湧水が著しく、作業が難航する。

6月19日　排水作業を続けながら調査を続行。10mn－11～13グリッドについて壁崩落の危険から埋め戻す。10mn－16～17グリッドの掘り下げを進める。

6月27日　湧水がさらに著しく、常時排水しながら、図面作成、遺物の取り上げ作業を進める。

6月30日　10mn－15～18グリッドでの調査続行が不可能と判断。現掘り下げ面までの遺物取り上げ、図面作成を行い埋め戻す。調査を渇水期に再開することにする。

10月31日　調査再開。10mn－17～18グリッドの排水、調査基準杭の打ち直しを行なう。

11月2日　10mn－18～19グリッド掘り下げ。平板測量。

11月8日　左岸側調査区調査終了。右岸側調査区の重機掘削を開始。

11月15日　青灰色グライ土掘削中に土器溜り検出。図化、写真撮影を行なう。

11月24日　10JK－20, 11JK－1，2で遺物第1包含層までの掘り下げ完了。木製品出土。

12月5日　調査区西半部で第1遺物包含層の遺物図化、取り上げ作業を急ぐ。湧水が著しいグリッドから埋め戻し開始。

12月11日　調査区西半部を放棄し、東半部の掘り下げを開始。

12月15日　調査区東半部で第1遺物包含層の到達。遺物の図化、取り上げに

追われる。

12月16日　現地説明会開催（参加者約150人）

12月25日　湧水が著しい中、夕刻に10JK−19グリッドで人形、斎串が多数出土。夜間までかかり、図化、取り上げを完了。

12月26日　土層図作成など掘り下げ中のグリッドについての残務を処理。

12月27日　埋め戻し。年末年始の休暇の安全確認。

平成2年1月5日　未調査区についての掘り下げ開始。

1月22日　各調査区の第1遺物包含層について掘り下げ完了。土層図作成・写真撮影に全力を注ぐ。

1月26日　埋め戻しと並行して図面作成を進める。

1月31日　埋め戻し完了。資材を撤去し、調査を終了する。

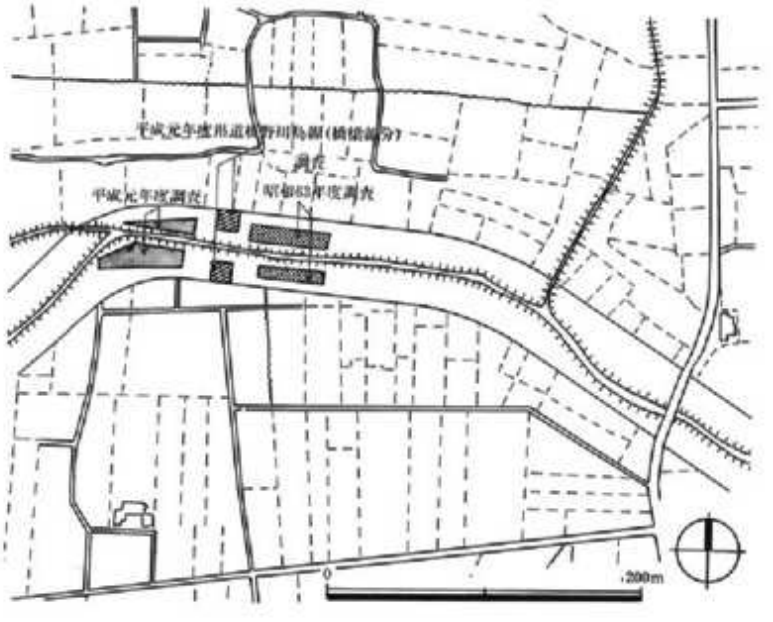


fig. 2　調査区位置図

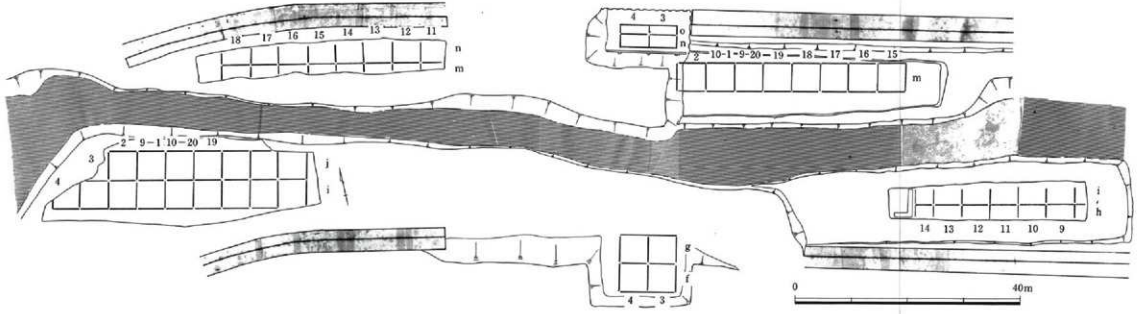


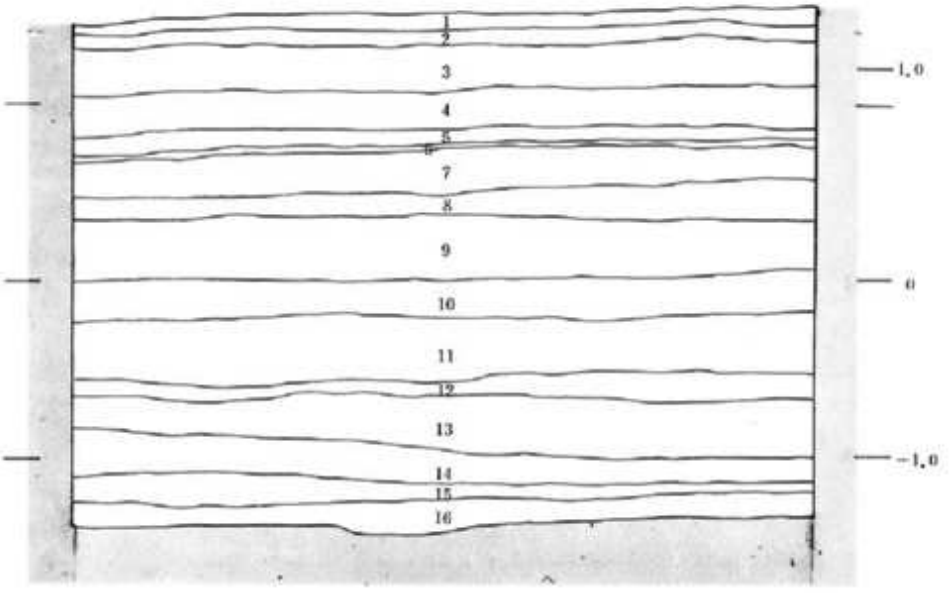
fig. 3　グリッド配置図

Ⅲ. 第Ⅰ次調査の成果

1．基本層序

第Ⅰ、Ⅱ次調査区とも基本層序に大きな違いはない。現地表面から約2.5ｍ下までは、河川改修工事によって既に掘削されているため、それ以下の層序について検証する。

暫定掘削面の直下には、灰色系の粘土層が分厚く堆積している。この堆積は、9層（以下図4の層番号）以上に対応し、中世を通じて形成されたものと考えられる。暫定掘削面直下の1～3層からは16世紀前半の年代を示す備前焼きの擂鉢や、室町時代後半の土師質土器の細片が出土した。また、5層からは、13世紀代の瓦器椀など（fig 5-1）が出土した。つづいて、本遺跡で鍵層となる「植物が腐食しないまま堆積した層」（10層）が拡がる。この層は、平安時代後期頃に堆積しており、当時は葦などが群生する干潟状の地形であったと推測される。



1暗緑灰色　5G4/1　粘質土
2暗緑灰色　10GY5/1　粘質土
3暗緑灰色　5GY4/1　粘質土
4暗緑灰色　10GY4/1　粘質土
5暗緑灰色　7.5GY4/1　粘質土
6暗緑灰色　7.5GY3/1　粘性砂質土
7暗緑灰色　10GY4/1　粘質土
8暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　粘質土
9暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　粘質土（炭化物を多く含む）
10オリーブ黒色　5Y3/1　粘質土（炭化物の互層）
11灰色　5Y4/1　粘質土（炭化物の互層）
12灰色　5Y4/1　粘質土（炭化物を含む）
13暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　粘質土（オリーブ黄色　5Y6/4ブロック状に含む）
14灰色　7.5Y4/1　粘質土（炭化物多量に含む）
15暗オリーブ灰色　2.5Y4/1　粘質土
16暗オリーブ灰色　5GY4/1　砂質粘質土

fig. 4　第Ⅰ次調査基本土層図

11 層以下は、木製祭祀遺物を大量に含む遺物包含層である。この包含層は、間層（15層）を挟んで11～14層までの上層部と16層以下の下層部に大きく分けられる。上層では土師器の杯・皿などが出土しており、10世紀前半頃に形成されたと理解される。一方下層部では、土器がほとんど出土せず、時期の特定が困難であるが、奈良時代～平安時代前期頃までの堆積層と考えられる。

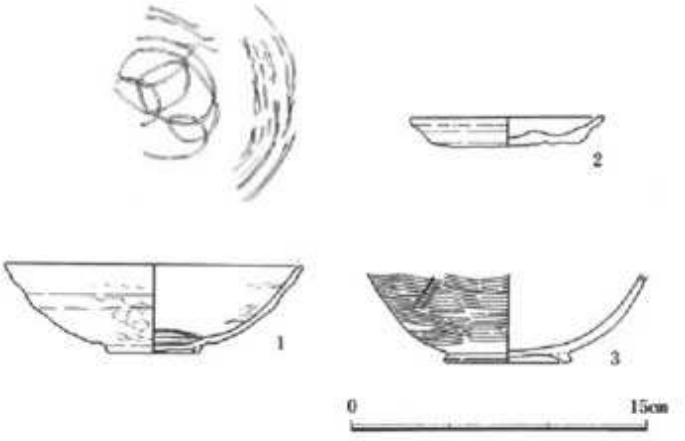


fig. 5　第5～10層出土土器実測図

2．出土遺物

(1)　中世の遺物（fig. 5，6）

ほぼ完形の瓦器や石製品、土錘、鉄釘などが出土している。5層から出土した瓦器椀（fig. 5-1）は、和泉型の瓦器であり、径15.2 cm、器高4.6 cm を測り、底部には断面三角形の高台を貼りつける。見込み部には螺旋状に、内面口縁部にかけては、同心円状に暗文を施す。外面は、口縁部付近まで明瞭にユビオサエが残る。尾上編年Ⅲ－2にあたる(1) 13世紀前半から中葉にかけての資料である。

有孔石製品（fig. 6-1）は、結晶片岩製で縁辺部に径1.0 cm の孔を穿つ。表面は炭

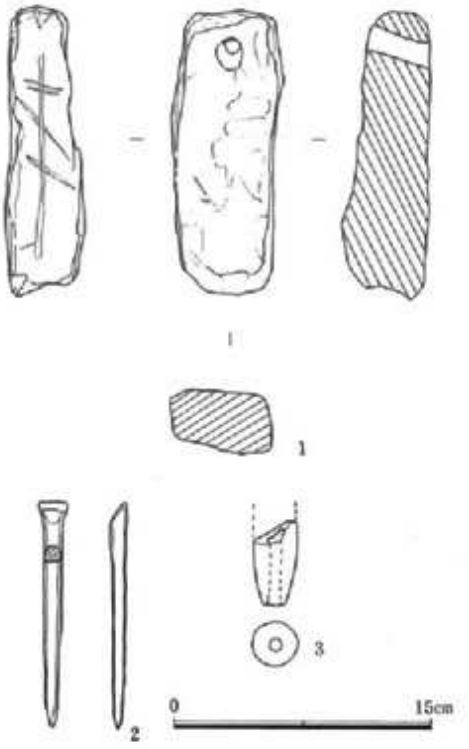


fig. 6　第5～10層出土遺物実測図

素が吸着し黒変しており、使用中にあぶられていたことが推測される。徳島市中島田遺跡の鎌倉時代の遺構からも類似した石製品が出土しており(2)、暖をとるため用いた「温石」である可能性が考えられる。

この他に、鉄釘（fig. 6-2）や管状土錘（fig. 6-3）が出土している。

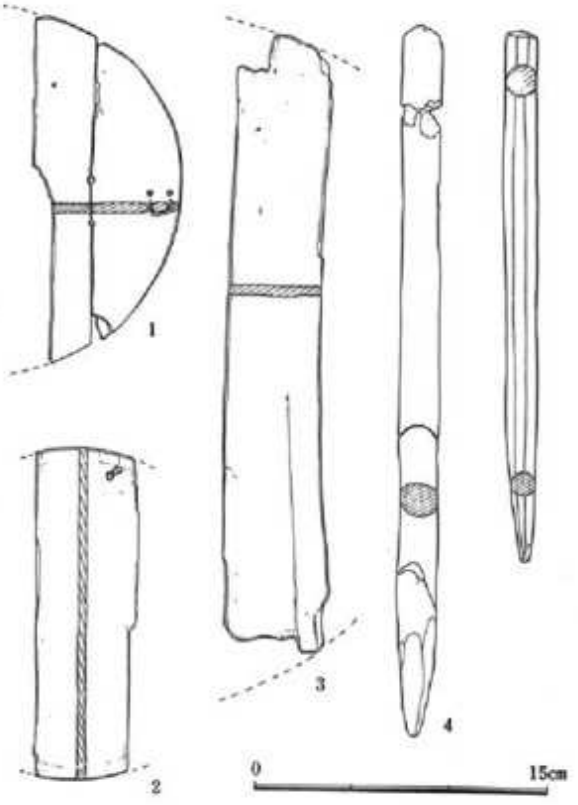


fig. 7　第10層出土遺物実測図

(2)　第10層出土遺物

土器（fig. 9-3）

基本層位でも述べた通り、10層は草木が腐食しきらず堆積した層で、本遺跡において鍵層の役割りをはたす。しかし、この層から土器がほとんど出土しないため、堆積した時期の特定が難しい。

黒色土器B類の椀（fig. 9-3）は、唯一図化が可能であった遺物であり、図面上ではほぼ完形に復元し得る。口縁に向かって大きく内湾しながら立ち上がり、低くしっかりした断面逆台形の高台をもつなどの特徴が認められる。器面は、内外面とも水平方向の緻密なミガキが施され、炭素の吸着もよく光沢のある黒色を呈す。徳島県内では、黒色土器B類の出土例が少なく畿内との併行関係で捉える以外ない。一応11世紀前半頃の遺物として考えておきたい。

木製品（fig. 7）

この層では、曲物や組合せ部材などの木製品が出土している。曲物蓋(1)は、復元径20で、側板の位置をきめる際に刻まれた円形の傷が残っている。側板との接合のため開けられた孔には樺皮が残り、中央部には蓋紐を通した孔がある。(2)は、直径17cm前後の円形で、(1)と同様に側板が樺皮で綴じされていた。(3)は直径40cm程度の大型の曲物の底板と考えられる。（4，5）は、楔状に先端部を尖らせたもので、組合せ用の部材としての用法

が推測される。

この層で出土する遺物には、律令祭祀具をほとんど含まず、曲物をはじめとした日用生活品や建築部材の断片が大半を占める。また土層の観察から10層の堆積した時期に、当該地が流路から干潟状に変わったと理解される。この微地形の変化は近接の集落の変化と密接に関連する可能性が考えられる。

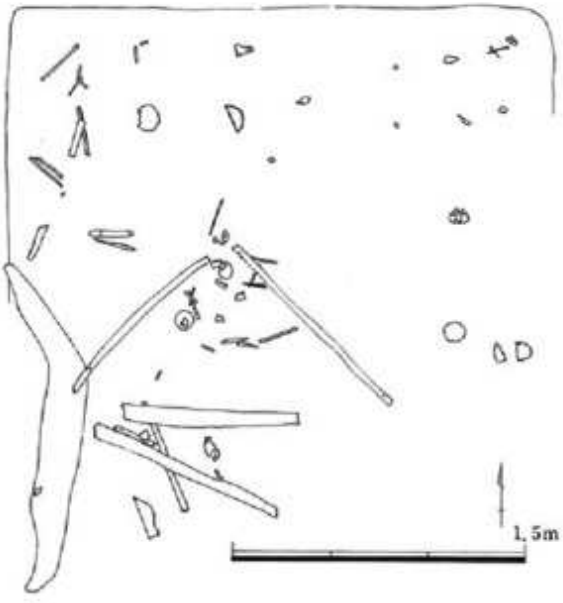


fig. 8　10m-1グリッド遺物出土状況

(3)　11～14層出土遺物

11～14層は、各層間に色、質で若干の違いが認められるものの、大きく一連の堆積と捉え、第1包含層と呼ぶことにする。ただし、上層に堆積する11、12層と下層の13、14では多少の時期差が認められる。

土器（fig. 9）

12層からは、足高高台の皿（fig. 9-3）が出土している。高台部は円筒状に直立し、口縁部若干「て」字状に屈曲しながら拡がっている。胎土はきわめて精緻で、きれいな明茶色に焼き上がる。13層から出土している同じ器形の皿(4)は、高台が「ハ」字状に内傾しており、そのため口径に差がないにもかかわらず、相対的に口縁部分が大きくなる。皿の口縁部(11)は、(4)と類似して稜をもって屈曲し拡がるが、高台はもたない。

10m-1，2グリッド周辺では、13層で土器がまとまって出土した。その大部分が、「須恵器系土師器」とか「ロクロ土師器」と呼ばれる須恵器と同じ成形法を用いた土師質の土器である。(1)(4) 器種はほとんど杯に限られる。成形技法は、回転ヘラ切り・ロクロナデが顕著なものと、円盤状の底部を先に成形し、口縁部を積み上げたものに分けられる。

前者に該当する（5,7,13）は、須恵器と同様に外底部を回転ヘラ切りや回転ヘラケズリで、口縁部は丁寧なヨコナデを施し成形する。このため焼きの悪い須恵器と際立った違いはない。

一方、後者には(2,8,9,10,12)があたる。(2,9,10）は、丹塗り土器で、円盤状の底部と口縁部間には接合痕があり、内外面とも卓越したヨコナデで表面を丁寧に仕上げ、丹を塗布

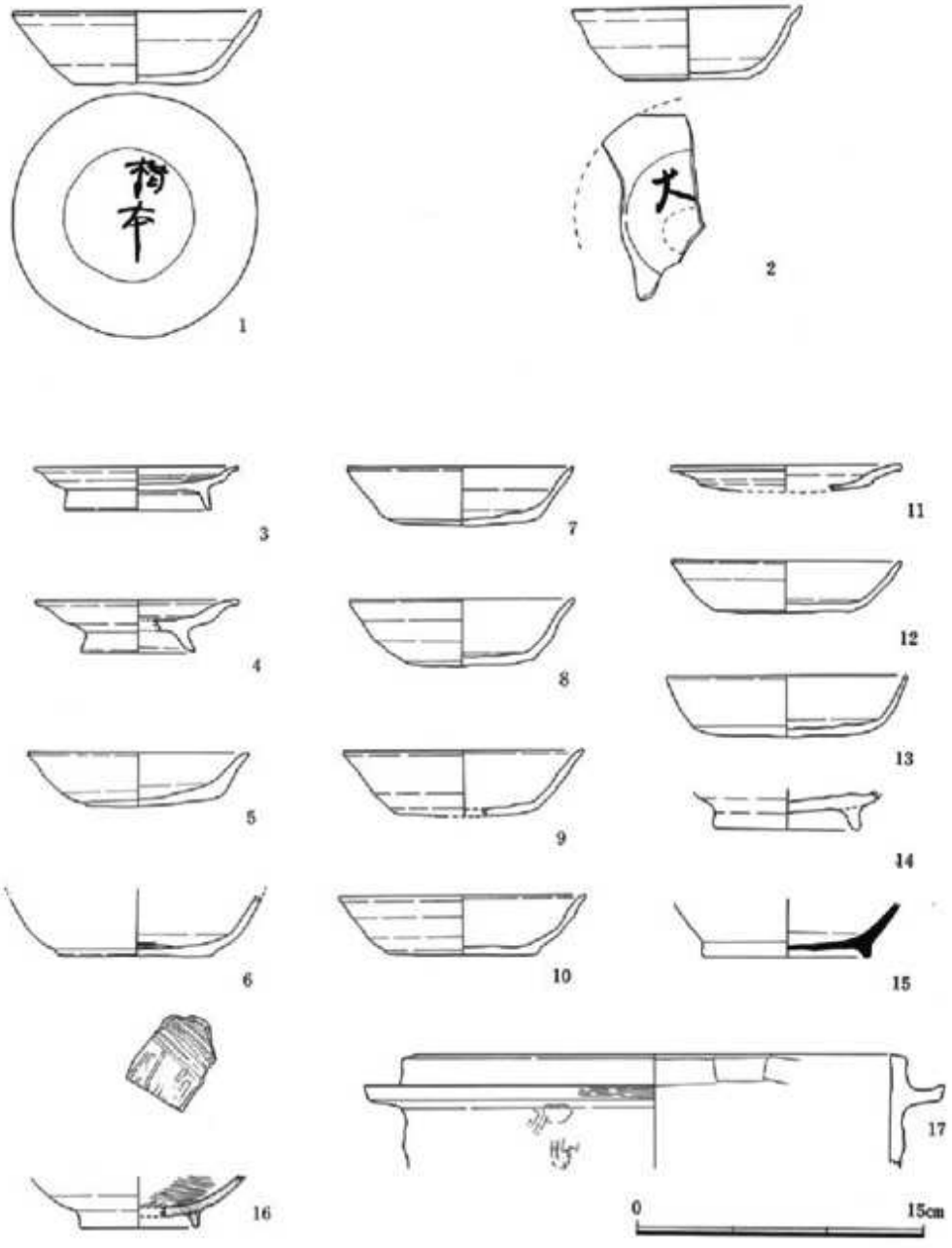


fig. 9　第１包含層出土土器実測図

している。(2)の外底面には、「大」＋解読不可能な一文字分の墨書が残っている。また(9)にも内面に部分的な墨痕が認められ、文字が書かれていたと思われる。(8)は、口径が11.7cmと他に比べ小さいわりに器高が3.6cmとあり、(2,9)とはやや異なるプロポーションを示す。

試掘調査で検出された墨書土器(1)も同一層から出土したと推測され、形状・技法とも(2,9)に類似する。外底部の墨書は「楷本」と書かれているが、「楷」の読みと意味については不明である。円盤状の底部には、とぐろ状に粘土紐の痕跡が明瞭に看取され、この上に口縁部を積み重ねている。内面は灰褐色で墨などの液体を塗布していた可能性が考えられる。(14,15)は土師器椀の底部と考えられるが、形状にかなりの差異が認められる。

(16)は瓦器椀の底部で、12層下層ないし13層上面から出土した。ほぼ直立する断面U字形のしっかりした高台をもち、内面には斜格子上の密な暗文が施される。形態上古いタイプの瓦器椀の特徴が認められる。混入品の可能性もある。

土師質の鍋は、復元口径25.0cmを測り、口縁端部から1.6cm下の部分に8mmの幅で鍔が巡る。口縁部に向かっての傾きはなくほとんど直立しており、「摂津型」(4)と呼ばれる鍋の特徴を示している。口縁部はナデ、体部外面は粗いタテハケとユビオサエが、内面はヨコ方向の板ナデが観察される。

木製品

本遺跡で、多量の木製祭祀具が出土したので、最初に主だった種類について、説明しておきたい。

人　形

人間の形代として呪いや祓などに用いたもので、古代においては罪や穢を流すための祓に使われることが最も一般的であったと考えられている。形状は、人を正面方向から投影したものが大半を占め、側方から投影したものは例外的である。その表現は、顔や着物などを写実的に表現したものから、ごく簡単に人の外形を作り出したものまで千差万別である。大きさも数cmのものから等身大ものまで個体差は著しい。(6)(7)(8)

斎　串

斎串は短冊状の薄い板の一方を剣先状に尖らせ、他方を圭頭状に作ったもので、側方は

切りこみを入れる場合が多い。用法は、人形などを用いた祭祀行為を行なう場を他と区別する「結界」の道具であったと考えられている。

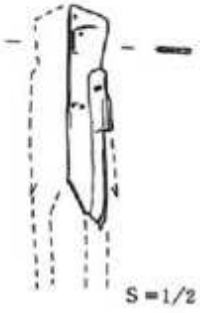


fig.10　第12層出土人形実測図

刺　串

他の遺跡では、串（状木製品）や箸（状木製品）と呼ばれていることが多い（本書まとめ参照）。本遺跡では斎串と伴出し、真中から手折られた状態で出土するケースが圧倒的に多いため、斎串と同様に結界の道具としての用法を推測している。刺串を手折る行為は、祭祀の完結に伴い流路に流す際、何らかの祭祀的な意味合いを込めて行なったのではなかろうか。

棒状祭祀具

長さ30㎝余りのイヌガヤの枝を切り欠きし、棒状のまま一方を尖らせ他方を圭頭状に作ったものである。また頭部に2ないし3方向から削りこみが施されているのは、斎串の削りかけと同様の意味があるのではないか。全国的にも類似する資料はなく、民俗資料などの検討を要する。いずれにせよ、この種の木製品も斎串と同様に結界に用いる祭祀具と考えられる。

① 第12層（fig. 10、11）

第1次調査で、出土した人形は1点のみであった。12層から出土した人形の上半部（fig. 10）は、頭部を圭頭状に作り、首・肩がくびれによって表現されたものである。頭部には眉・目・鼻がはっきりと墨書きされている。これ以外に額と胸に墨痕が認められる。これは人形に込められた祈りの内容（病気治癒を願った場所など）と密接に関係するものと思われる。この人形は、完形でも長さ10㎝前後の小型品であろう。

12層出土の斎串（fig. 11-1～3）は、削りかけの施した方で(1,2)と(3)ではっきりとした違いが認められる。(1,2)は、頭部両側縁部では下方に、中央部両側面から上方に向かって、それぞれ2ないし3回以上の削りかけを加えている。一方(3)は、圭頭状の頭部のコーナーに斜め下方に向かっての削りかけを1回加えただけである。これまで、削りかけを施す位置・方向・回数を指標とする斎串分類がなされてきた。削りかけが、単位置・単回数のものが古く、時間の経過に伴って複数位置で多くの削りかけをもつものが新しいとする

編年観が示されてきた。(8)(10) 本遺跡では、新しい要素をもった斎串(1,2)と古いタイプの斎串が同一層から出土しており、従来の編年観にはそぐわない。

(4)は、圭頭状に幅2.1㎝、厚さ1.4㎝の角柱状のものである。これがそのまま製品なのか、斎串などをつくる際の半製品なのか断定できない。(5)は、幅1.9㎝の薄い板状の製品で、端部に径2.1㎜の孔がある。扇や紐綴した木簡の一部の可能性があるが、決め手に欠ける。(6,7)は刺串の下半分と考えられ、上半部は祭祀行為によって手折られたため欠損したと考えられる。

② 第13、13'層(fig. 12、13)

この層は、木製品の出土量が著しく、斎串についても完形に近い資料が多数出土している。(fig. 12-1)は長さ51.6㎝余りを測り、本遺跡で出土したなかで最も大型品である。削りかけは、頭部上方に2～4回、頭部側面で下に向かって3ないし5回、中央部分で上下方向から2ないし3回の削りかけを加えている。(2)は鋭角に頭部を作出し、推定長33㎝、幅2.6㎝を測る。頭部上方から3回、頭部側面に5回以上の削りかけを施すが、以下の場所には削りかけを施さない。(3,4)は、一つの斎串の頭部を薄く2つに割ったもので、この行為は、削りかけを施したのち加えたものであるため、作業工程の途中に行なったとは考えられず、明らかに祭祀行為に伴って行なったと認定できる。

同様の遺物は、図化し得ない断片も含めて数

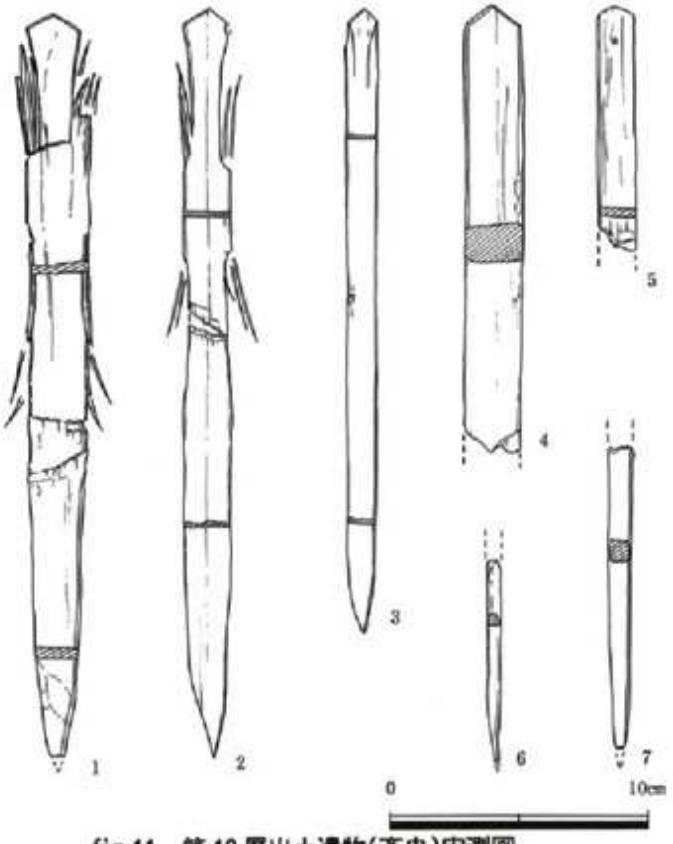


fig.11 第12層出土遺物(斎串)実測図

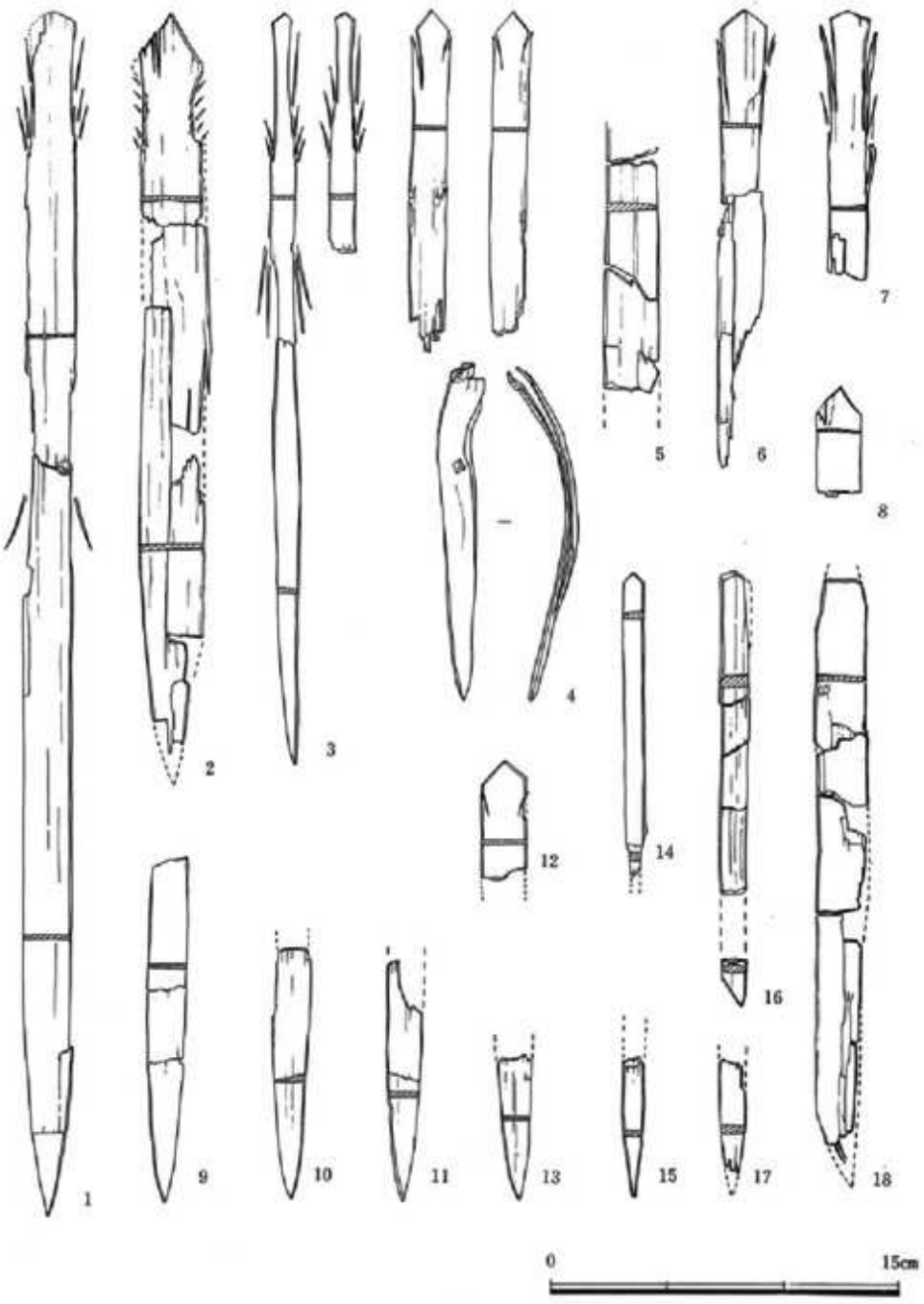


fig.12　第13、13'層出土遺物(斎串)実測図

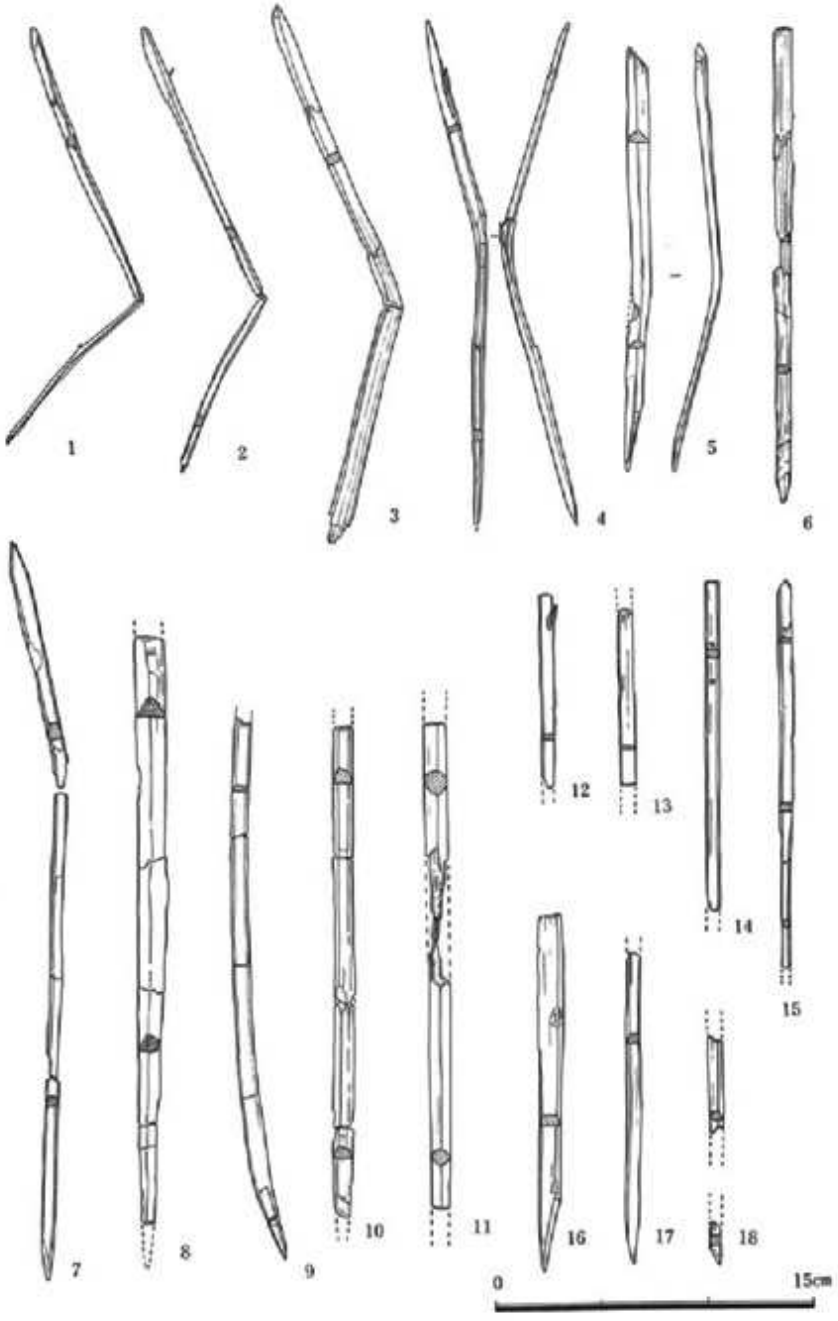


fig.13　第13、13′層出土遺物(刺串)実測図

点確認され、本遺跡における斎串の用法上の特徴として理解される。(3)は、長さ32.4 cm、幅1.1 cmで、上端部から約10.2 cmまで切り込みが入っている。削りかけは、頭部上方から側面にかけて4回以上、中央部で下方から2回加える。(4)は、幅1.6 cm、長さ約29 cmを測り、切り込みは上端から約14 cmまで及ぶ。削りかけは、頭部上面の側面に近い場所に1回加えたのみである。(5~8、12)は斎串の頭部である。頭部の形状は、鋭角のもの(5、8)鈍角のもの(6、7、12)とばらつきがあり、それが時期差・用途の大きな指標になるとは考えにくい。削りかけに関しては、頭部付近の形態比較にすぎないが、(5、8、12)のように頭部上面ないし側面に1回のみ加えるものと、(6、7)のように頭部側面に2ないし3回以上加えるものに区別される。

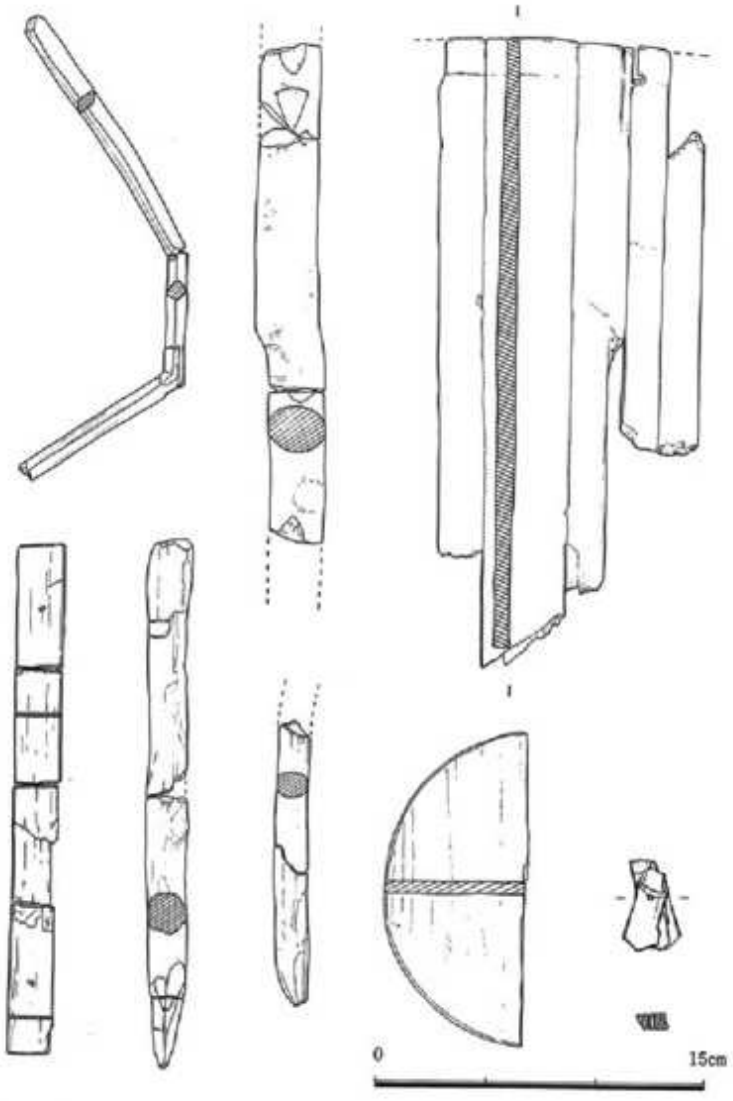


fig.14　第13、13'層出土遺物実測図

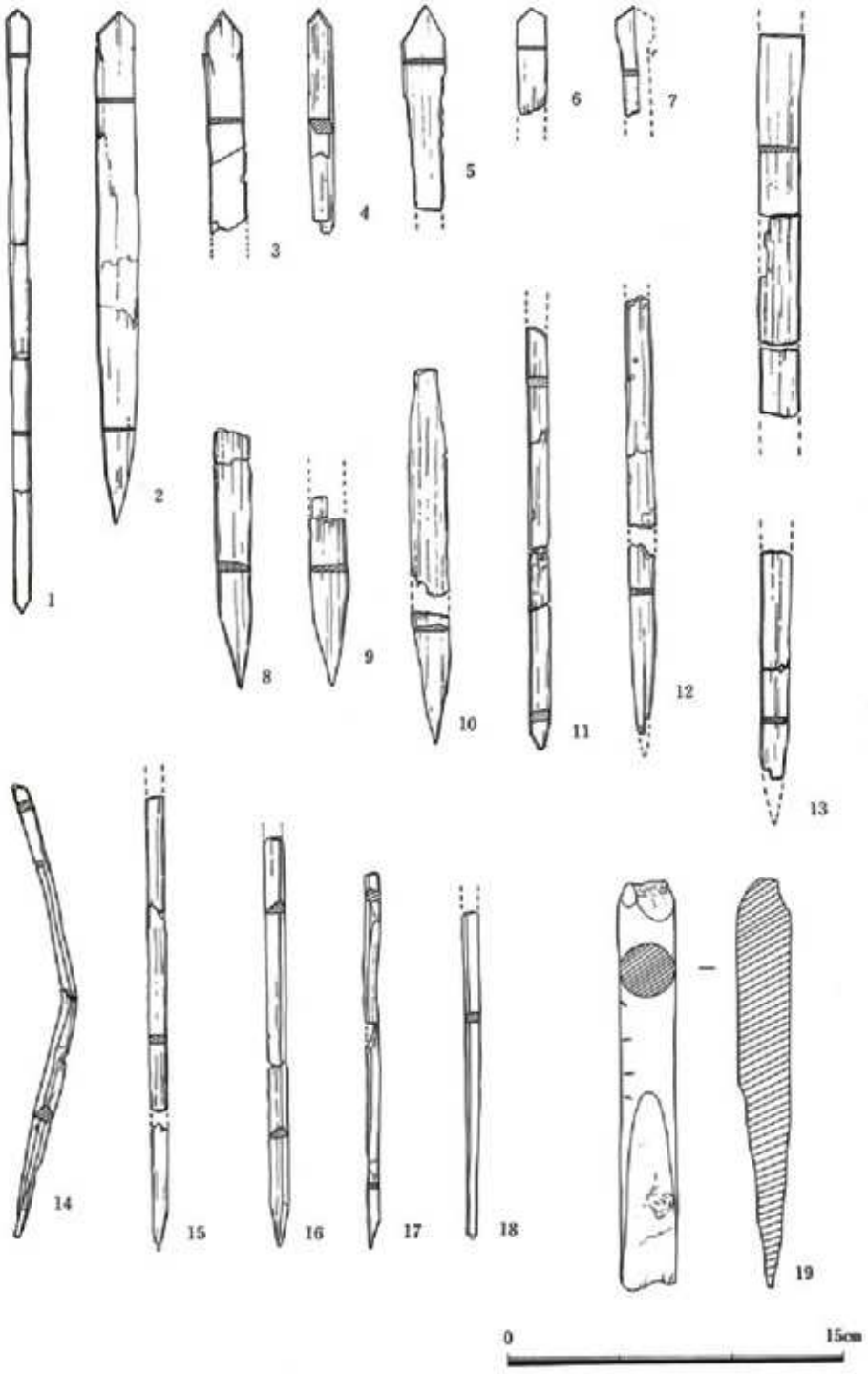


fig.15　第15、16層出土遺物(斎串)実測図

この特徴は、(1～4)の完形品においても認められるもので、本遺跡では、一般的に古い形態と言われる削りかけ1回のものと、後出タイプとされる削りかけが、複数箇所、複数回施されるものが、同時期に使用されていた可能性が強い。

(9～17)はいずれも斎串の脚部である。(18)は斎串を想定して図化しているが、図上の下端部が刀先状に作られていることも予想され、その場合刀形となる。

fig. 13は、刺串をまとめているが、完形品である(1～6)にみられるように長さ20～27㎝、断面一辺5㎜前後の四角ないし三角形の箸状の製品が、中央部分で2つに折られている。(7)は長さ35㎝と他に比べると大型品であるためか、2箇所で折り曲げられている。他は、折れ曲がった所から半存ないしは、一部が残った刺串である。

その他に、曲物の底(蓋)板、棒状の用途不明の木製品などがある。(fig. 14-1)は、面取りされた7㎜角の棒状木製品で、先端部は山形に作り出す。刺串として使用された可能性が考えられる。(3、4、5)は、fig. 16掲載のものと同様に棒状祭祀具と思われ、(3、4)には削り欠きが認められる。(4)は長さ24.3㎝と他の棒状祭祀具よりかなり短い。(6)は、大型の曲物の底板で、端部から1.5㎝のところに側板接合の目安となる掻き跡が見られる。(7)は、円形の曲物の底板であり、直径14.5㎝と小型品である。(8)は、檜扇の要部分で4枚の部分が木製の止め具によって止められている。徳島県内での檜扇の出土は、本例が初めてである。

(4) 15、16層出土遺物

先にも述べたように、12～14層は遺物の密度の濃い包含層であるが、直下層の15層ではほとんど無遺物層の状況を呈する。この間層をはさんで16層では、再び木製品のを多く含むようになる。12～14層と時期差が想定されるが、時期判断の下せる土器は共伴しない。

斎串(fig. 15-1～13)

出土した遺物を見る限り、細身で削りかけの回数が少なくなる傾向が認められる。(1)は幅9㎜しかないが、頭部は圭頭状に作り、尾部は尖らせて斎串の形態を整える。(2)は長さ22.8㎝、幅1.7㎝で頭部を圭頭状、尾部を柳葉状に尖らせ、頭部側面に1箇所の削りかけを加える。

(3～7)は頭部の断片で、幅1.5㎝前後のものばかりである。(3)は(2)と類似した形状

を示すと考えられ、頭部側面に1箇所削りかけが加えられている。(8～13)は、斎串の尾部である。(11)以外は柳葉状を示すが、(11)は(1)と類似し、尾部先端を三角形に尖らせる。

刺串（fig. 15-14～18）

刺串は中央部で手折られ、半分が欠損するものがきわめて多い。(14)は長さ21㎝で、断面三角形を示し、下端部は尖らせる。ほぼ中央部で、2つに折り曲げている。(17)についても同様にほぼ中央部分で2つに折り曲げられている。

棒状祭祀具（fig. 16）

棒状祭祀具は、イヌガヤの枝を材料にして、上端部を山形や尖塔状に、下端部を尖らせ

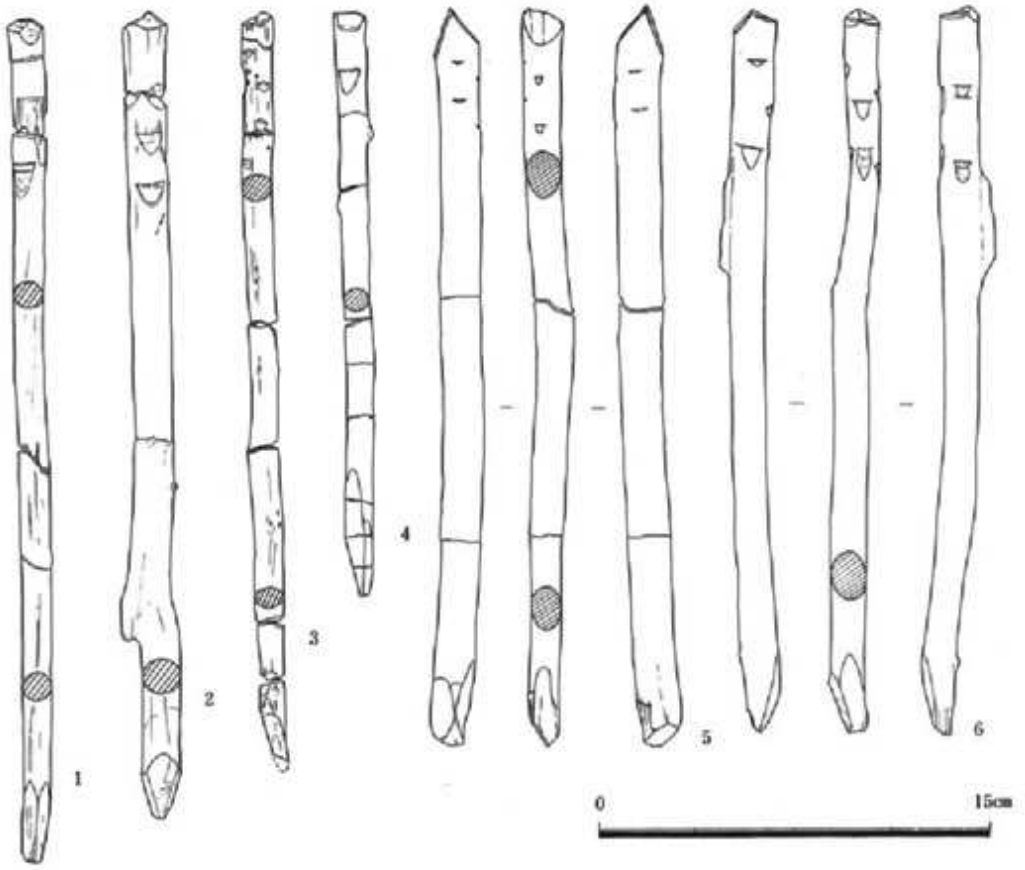


fig. 16　第16層出土遺物(棒状祭祀具)実測図

て作っている。長さは、30㎝（ほぼ1尺）前後が多く、規格性をもつ。上端部近くには、数回の削り欠きを施す。

(1)は、長さ44㎝、径1.6㎝を測り、上端部は5方向から尖らせる。削り欠きは1方向から2回施される。(2)も(1)と類似した形態を示し、長さ41㎝、径2.0㎝を測る。削り欠きは、(1)と同様1方向から2回施される。(3)は、長さ約40㎝、径1.4㎝で、削り欠きを1方向から3回施しているが、3つの削り欠きが直列せず、かつ不明瞭である。(4)は、長さ30㎝と他に比べて短いが、形態上の特徴は備えている。削り欠きは、1方向1回加えられる。(5、6)は、長さ(38㎝)、太さ(2.3㎝)が極めて類似し、かつ同一地点で並んで出土したことから、2本が1セットをなして投棄されたようである。頭部は2方向から山形にカットされ、削り欠きは3方向から2回づつ施している。

④　その他の木製品（fig. 17）

櫂状の木製品(1)は、長さ29.5㎝、最大幅4.7㎝を測り、素材は広葉樹である。両端部が生きているため、長い柄が付くとは考えられず、いかなる用途の製品かわからない。表面は、金属工具による整形痕が観察される。

曲物の蓋(2)は、直径19.5㎝、器高3.1㎝を測り、今回出土した曲物のなかでは、最も原形を留めるものである。蓋板には、側板を接合する場所を示す円形の掻跡が付け

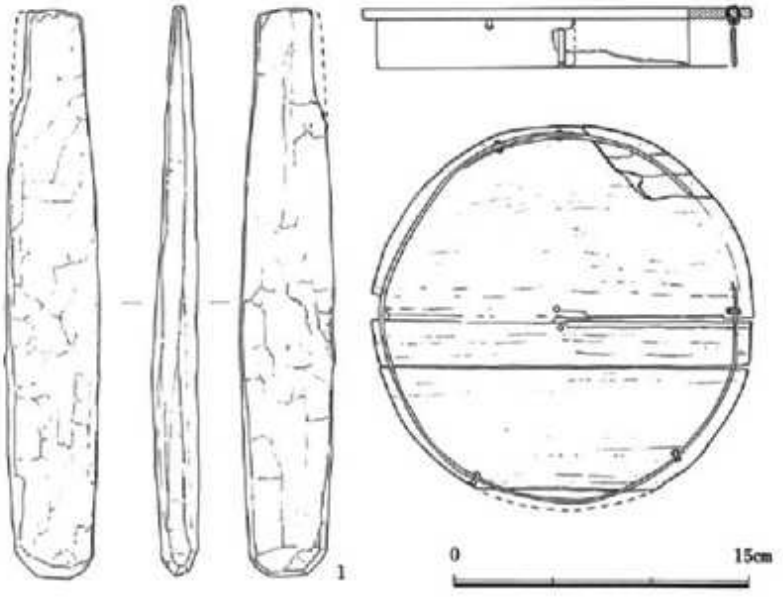


fig.17　第16層出土遺物実測図

られ、それに基づいて側板が取り付けられる。蓋板と側板は、5箇所で樺皮を用いて縛り止めている。蓋板中央部には2つの孔が穿たれ、紐を結わえつまみにしたと考えられる。

本遺跡では、曲物の蓋ないし底板を側板と接合する際に、蓋（底）板に段をつけたものや木釘を使って打ち止めたものは出土していない。

(5) 左岸側試掘坑出土木製品（fig. 18）

本遺跡跡発見の契機となった№10杭左岸部で試掘を行った際に出土して遺物である。試掘坑の場所は、調査時に10m-1グリッドで再確認された。出土した遺物は前掲の墨書土器（fig. 9-1）も含めて第12～14層に由来するものと考えられる。

斎串（1～3, 4～8）は、完形のものはなく、いずれも頭部もしくは下端部を図化し得たものであるが、(7)は、概ね形状が推測できる。頭部は圭頭状、尾部は剣先状とノーマルな斎串の形状を示し、削りかけは、頭部側面で4回以上施している。刀形（9、10）は、上端部を刀状に作り出し、根元の部分はやや細く成形している。(4)は端部のない薄板の断片にすぎないが、眉と目の表現と判断できる墨書が認められることから、人形の一部と考えておきたい。

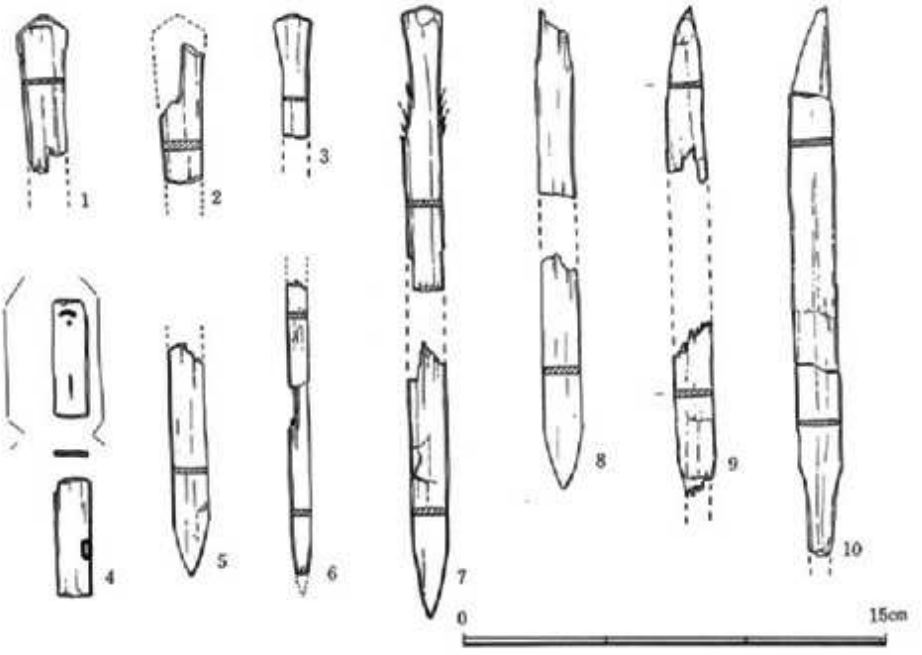


fig.18　10m-グリッド付近試掘坑出土遺物実測図

註

(1) 尾上　実　「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集』1983

(2) 福家清司　「県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島田遺跡・南島田遺跡」徳島県教育委員会　1989

(3) 橋本久和　「西日本における土器からみた古代から中世の転換期」『土器からみた中世社会の成立』1990

(4) 橋本久和　「畿内周辺の回転台土師器」『考古学研究』第38号第1号　1991

(5) 菅原正明　「畿内における土鍋の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究創立30周年記念論文集　1983

(6) 金子裕之編　「律令期祭祀遺物集成」律令祭祀研究会　1988

(7) 金子裕之　「都城と祭祀」『古代を考える　沖の島と古代祭祀』1988

(8) 水野正好　「人形ーその世界ー」『古代の顔』福岡市立歴史資料館開館10周年特別展　1982

(9) 黒崎　直　「斎串考」『古代研究』第10号　1977

(10) 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡」香川県埋蔵文化財研究会　1990

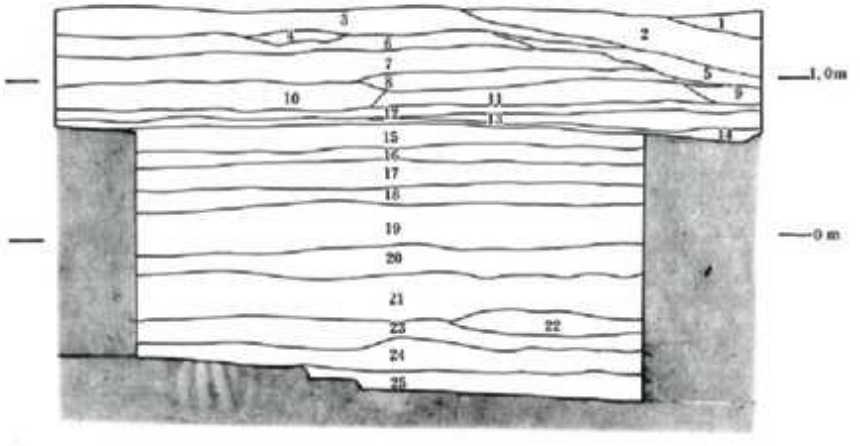
Ⅳ　第Ⅱ次調査の成果

1　基本層序

第Ⅰ次調査と同様、中世に堆積した青灰色系のグライ層以下の層序について確認した。基本層序は、第Ⅰ次調査区と隣接することから対応関係をおさえることが可能であった。

河川改修工事に伴う暫定掘削面直下には、青灰色系のグライ層（fig. 19 - 1～18 層）が分厚く堆積する。詳細に検討すると、土器を伴った土坑状の落ち込み（fig. 19 - 9 層）も認められる。

本遺跡で鍵層となる有機物を多量に含んだ黒色土層（19 層）は、調査区全域で確認され



1黒色　10Y3/1　粘質土
2黒色　10Y4/1　粘質土
3黒色　2.5Y5/1　粘質土（土器の出土が著しい）
4オリーブ黒色　5GY3/1　粘質土
5暗オリーブ黒色　5GY4/1　粘質土（植物が多い）
6オリーブ黒色　2.5GY3/1　粘質土
7黒色　10Y3/1　粘質土
8緑黒色　10GY3/1　粘質土
9暗緑黒色　7.5GY4/1　粘質土
10暗緑黒色　7.5GY4/1　粘質土
11暗オリーブ灰色　2.5GY6/1　粘質土（しまりが強い）
12暗緑黒色　7.5GY4/1　粘質土
14暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘質土
15暗緑黒色　10GY4/1　粘質土（オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土を微量に含む）
16暗緑黒色　10GY4/1　粘質土（オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土を含む）
17暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘質土（オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土を微量に含む）
18灰色　10Y4/1　粘質土（炭化物を含む）
19黒褐色　2.5Y3/1　粘質土（有機物、炭化物を含む）
20オリーブ黄色　5Y5/2　粘質土
21暗オリーブ黄色　2.5GY4/1　粘質土（オリーブ黄色　5Y6/4巻貝の遺骸を含む）
22灰色　7.5Y4/1　粘質土（炭化物、オリーブ黄色　5Y6/4巻貝の遺骸を小量含む）
23灰色　10Y4/1　粘質土
24灰色　5Y4/1　粘質土（炭化物、オリーブ黄色　5Y6/4巻貝の遺骸を小量含む）
25暗緑黒色　7.5GY4/1　粘質土（炭化物、オリーブ黄色　5Y6/4巻貝の遺骸を小量含む）

fig.19　第Ⅱ次調査基本土層図

るが、層の厚薄にかなりのばらつきが認められた。

遺物包含層は、上層部（21、22層）下層部（24、25層）でそれぞれ検出されたが、第1次調査に比べ地下水位が高く、いずれのグリッドでも第2包含層を完掘することはできなかった。

2　出土遺物

(1)　10K－19グリッド土器溜り出土遺物（fig. 20）

10K－19グリッドでは、土層図で確認される落ち込み（fig. 19－9層）から土師質土器数個体分が出土した。出土した土器は、すべて直径11.5～12.5㎝、深さ2.0～2.5㎝の軟質の土師質皿であった。特に、(2)～(5)は、直径12.0㎝と規格性がみられ、底部に、ヘラ切り痕がある以外は、ナデで調整されている。この土器溜りの直上層から15世紀末頃の備前焼擂鉢（fig. 22 - 1、2）が出土しており、土器溜りも室町時代後半に形成されたものであろう。

(2)　上層（青灰色グライ層）出土遺物（fig. 21）

備前焼擂鉢（fig. 21 - 1、2）は、青灰色グライ層の最上層より出土した。(1)は、口縁部を上下方向に拡張して大きな口縁端面を有するもので、間壁編年Ⅳ期の新しい段階(1)（15世紀後半）のものである。(2、3)は、土師質土器の脚付鍋もしくは羽釜の脚部である。本県において、同種の遺物は、中世遺跡の調査ではしばしば出土する。徳島市中島田遺跡では、鎌倉時代後半と考えられる遺構から脚部が出土しており、(2) 板野町宮ノ前遺跡では、16世紀初頭の遺構から同種の脚部が出土している。(3) 本県では「脚付鍋」が、鎌倉時代後半に遡って普及し中世を通して使用されている。

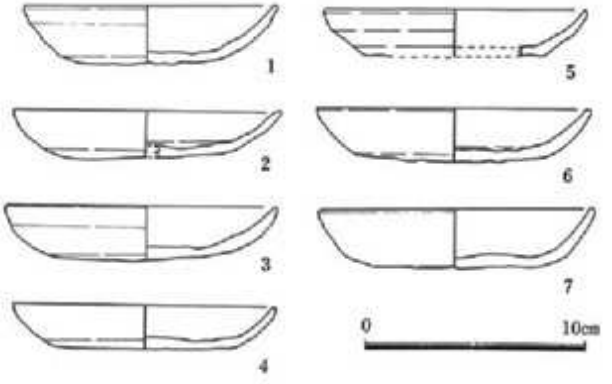


fig.20　10k -19グリッド土器溜り出土遺物実測図

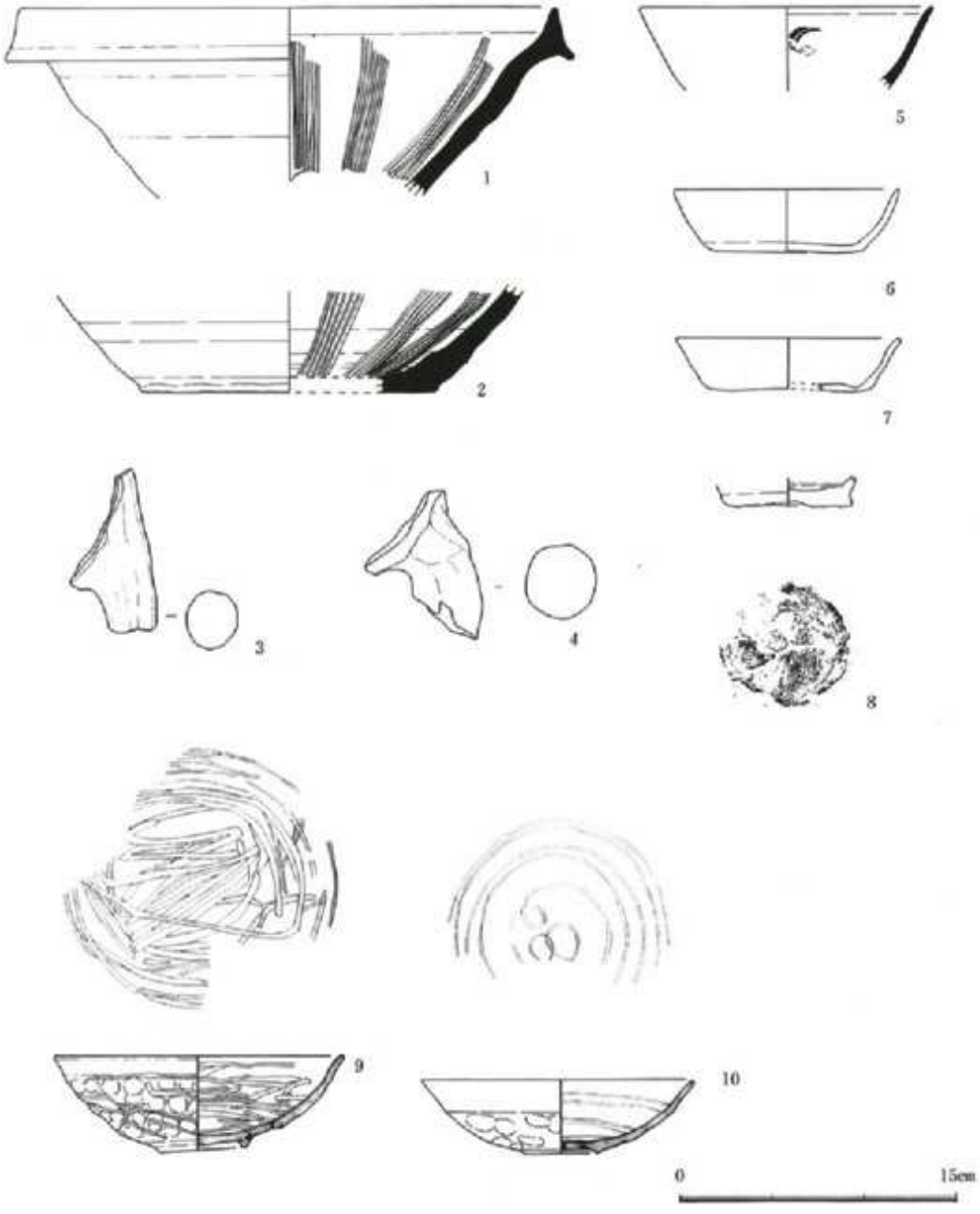


fig.21　上層（青灰色グライ層）出土遺物実測図

(5)は、龍泉窯系の青磁椀である。内面にわずかに陰刻された文が看取される。(6、7)は土師質土器の杯で、口径が12.2cmで、底部には回転ヘラ切り痕を残す。これは、中島田遺跡で杯FIと分類される一群に該当し、鎌倉時代後半頃の年代が考えられている。(8)は径6.8cmを測る円盤状の底部を有する土師質土器の皿で、底部には明瞭な回転糸切り痕を残す。これは、中島田遺跡の分類のⅢAに該当し、やはり鎌倉時代後半頃のものと考えられる。(4)

(9、10)は、和泉系の瓦器椀である。(9)は、口径15.5cm、器高5.2cmとかなり大振で、底部には断面台形のしっかりした貼りつけ高台を付加する。外面は、口縁端部の直下を除き指頭圧で成形し、部分的に粗雑な暗文も看取される。内面は、見込み部にジグザグ状に、外周部には渦巻状暗文を施す。口縁部は内外面とも強いナデ調整を行う。法量は適合しないが、外面に省略された暗文を残すなどの技法から、尾上編年Ⅱ－3～Ⅲ－1に併行する時期(5)のものと考えられる。(10)は、口径14.8cm、器高5.0cmで、底部に退化した高台を貼りつける。外面は下半部にユビオサエをとどめ、内面は見込み部に3回転ほどのループ状、それ以外同心円状の暗文を施す。尾上編年Ⅲ－3に併行するものである。

fig. 22　第19層出土遺物実測図

(3)　第19層出土遺物（fig. 22）

第19層中には、多量の木片を含んでいたが、製品と認められるものは、ごく僅かであった。(1)は、檜の皮に近い材からつくられた斎串である。頭部は鈍角に尖らせ、側面部に上方から2回程度の削りかけを加える。

横櫛(2)は、横幅約9cm、縦幅3.4cmで背部は僅かに湾曲るものの直線的であり、断面は背部が丸く柳葉状を呈する。櫛歯密度は、1cm当たり10条前後であり、中ないしやや粗めのものと考えられる。

(4)　第21、22層（第1包含層）出土遺物（fig. 23、24、25、26）

21層上層から出土した斎串（fig. 23）は、長さ20.8㎝、幅2.1㎝を測り、頭部は圭頭状に尾部は鋭角に尖らせる。側面の上端近くから1回だけ削りかけを施している。

fig. 24、25、26掲載の遺物は、22層から出土した。（fig. 24－1）は、残存長34.7㎝、幅1.8㎝で、一方の端から2.8㎝付近を削り欠いて、くびれを作り出している。(2)は長さ29.0㎝で、(1)同様に一端にくびれ部をもつ。（1、2）とも形状から木簡であることが考えられるが、表面には墨痕は残らない。くびれを人形の首の部分と判断し、抽象的な表現で作られた人形と理解したい。

fig.23　第21層上層出土遺物（斎串）実測図

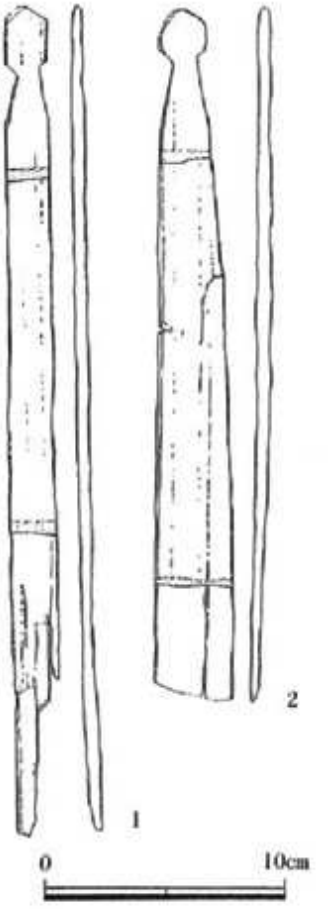


fig.24　第22層出土遺物（人形）実測図

斎串（fig. 25-1～5、8、9）では、削り欠けを複数回上下2方向から施すものが目につく。(1)は、土圧で湾曲しているが、復元長さ17.3㎝、幅約2.2㎝を測る。頭部は鋭角に尖らせ頭部角から下方、それと対象に上方に向かっての削り欠きを施す。(2)は頭部が折れ曲がり、尾部はほとんど欠損する。頭部は鈍角で、削り欠きは、頭部角から下方に向かって5ないし6回、数㎝下では下から上へ2回対象的に加える。（3、4）は頭部は鋭角で、削り欠きは側面に1回加える。(5)は長さ23.2㎝、最大幅8㎜で角柱状の祭祀遺物である。(8)は頭部が鋭角で、削り欠きは認められない。(9)は頭部鋭角で、側面部には上から下へ3ないし4回、下から上に4回の削り欠きが施される。(6)は部材の一部と考えられ、ほぞ穴状の加工がされている。（7、8）は刺串である。

棒状祭祀具（fig. 26）は、完形品が2点出土した。(1)は、長さ約40㎝、直径3.0～3.5㎝と第Ⅰ次調査で出土したものよりひとまわり大型品である。一方向、1箇所に削り欠き

を加える。(2)は、長さ36cm、直径2.0～2.5cmで、一方向、3箇所に削り欠きを加える。また、圭頭状に作り出した頭部に、削り欠きを加えた方向に直交して、上方より切り込みを入れている。この切り込みは、祭祀の際何らかのものを差し込む目的で施されたと推測される。第Ⅰ次調査の棒状祭祀具は、第2包含層から出土し、形態、寸法に統一性が認められた。しかし、(1、2)は、第Ⅰ次調査のもの(fig.16)のような形態、寸法に規格性が認められない。層位の違いに現れる時期差を示すものと考えられる。

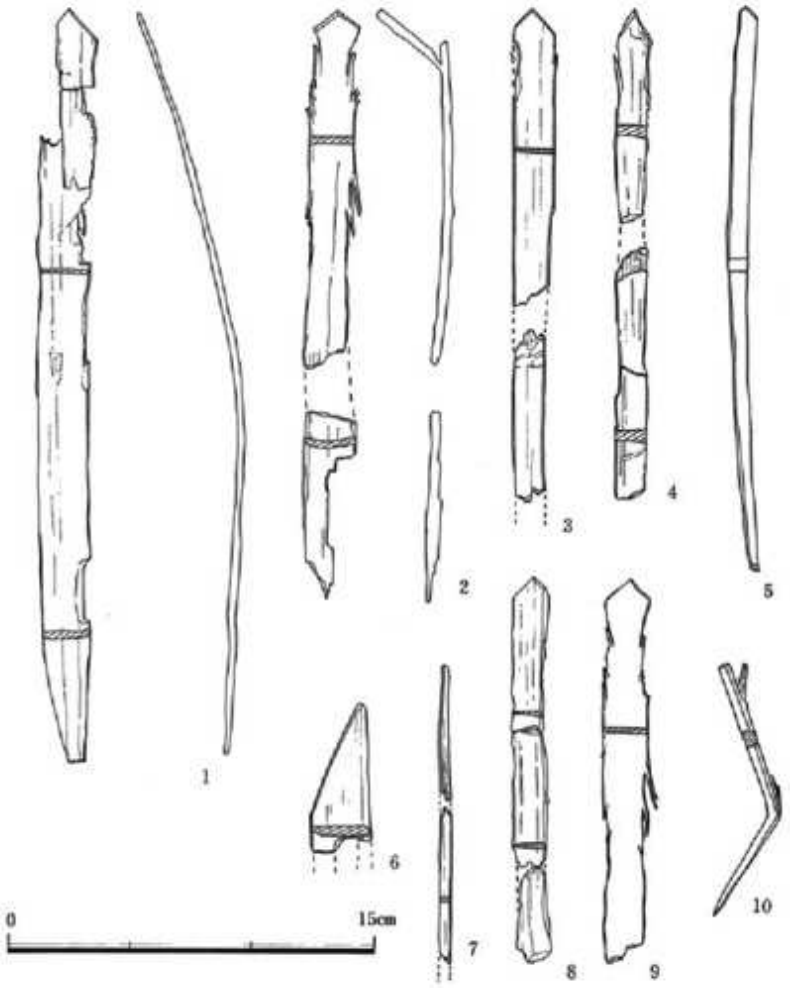


fig.25　第21,22層出土遺物実測図

註

(1)　間壁忠彦・間壁葭子　「備前焼研究ノート(2)」　『倉敷考古館研究集報2』　1966

(2)　福家清司　「県道徳島鳴島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島田遺跡」　徳島県教育委員会　1989

(3) 「宮ノ前遺跡現地説明会資料」 徳島県教育委員会 1990

(4) (2)と同じ

(5) 尾上 実 「南河内の瓦器椀」 『藤澤一夫先生古稀記念論集』 1983

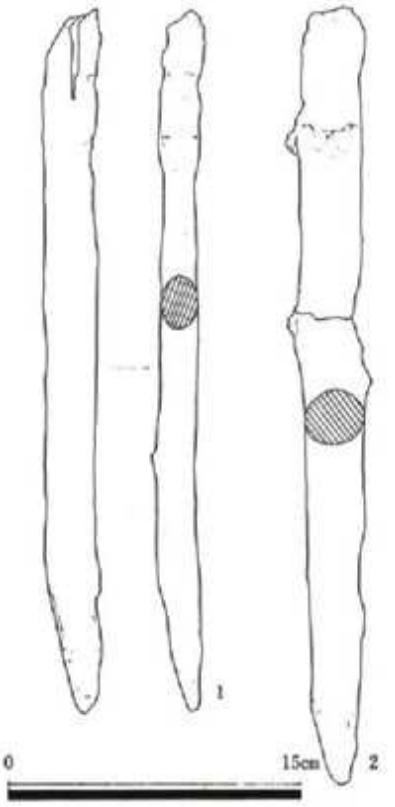


fig. 26
第22層出土遺物(棒状祭祀具)実測図

V 小 結

本遺跡の位置付けについて

徳島県における律令祭祀遺物の出土は、本遺跡を含め4遺跡6地点が知られ、(1) いずれもが官衙関連遺跡とされている。阿波国分寺跡は国府域周辺にあり、庄・南庄遺跡と本遺跡は、名東と板野の郡衙が推定される地点にあたる。

名方（名東、名西）、板野の両郡は、吉野川下流域の豊かな穀倉地帯を占め、弥生時代から阿波のなかでは最も畿内色の強く受け入れた先進地域であったと考えられる。律令時代には名方郡に国府がおかれ、南海道の沿線にあたる板野郡とともに中央の制度・文化が反映されやすい要因があった。これらを考慮すると、本遺跡近辺に所在したであろう板野郡衙では、都から人形・斎串等を使用した律令祭祀がいち早く浸透した理解しやすい。また、淡路から撫養を経て郡頭駅に至る交通手段に水運が用いられたと考えられ、板野郡衙や郡頭駅は港津としての性格上、海路の安全を願ったり、他地域から入ってくる邪気を祓うために律令祭祀具を使用した祭祀を盛んに行ったのかもしれない。

木製祭祀遺物の特徴

本遺跡の木製祭祀遺物は、共伴する土器から平安時代中期のものと考えられる。人形、斎串といった普遍性をもつ遺物以外に、棒状祭祀具と仮称している特異なものも出土している。人形は斎串に比べきわめて数が少なく、これを律令祭祀における主たる形代と従たる斎串の関係として認識する一方で、結界の道具として斎串が広範な用途に使用されていたと類推することも可能であろう。

また、今回多数出土した箸状の木製品は、大半が投棄以前に中央部で折られていた。前段で、これらを「刺串」と呼び、斎串と同様に結界の道具としたが、この種の遺物が先の仮定と異なり、見たまま箸であったかもしれない。民族例に、山仕事をする人が山で使った箸に山の神がつくのを恐れて折り捨てる風習がみられるように、(2) 箸は魂が宿る神聖な道具として扱われ、投棄時まで注意が払われるべきものであった。本来の用途を知るすべはないが、手折り捨てた行為にある祭祀的意義については注目しておきたい。

本遺跡出土の回転台土師器

第1次調査区の第1包含層において、木製祭祀具に混じり土師器の杯・皿がまとまりを

もって出土した。発掘当時（1988年）は、これらが硬質で須恵器に似た土師器であるため位置付けに苦慮した記憶がある。ちょうどその頃、回転台土師器に関する資料検討が各地でなされ、(2) 本遺跡の土師器も回転台土師器であると認識できるようになった。今や回転台土師器は、古代から中世の土器研究の重要な部分を占めるに至っている。

本遺跡の回転台土師器は、例外なく回転ヘラ切りであるが、個々に見れば大きく２つにグループ分けができそうである。まず第１群（fig. 9-1,2,9,13)は、器高が高く、赤彩されたものを含み、「左手手法」による円盤状底部に体部を積み上げたことが看取されるものをいう。これに対して、第２群（fig. 9-5,7,8,12）は、底部から体部まで回転台を使用し一貫した製作工程で作られており、須恵器と酷似する。橋本久和は、回転台土師器を「在来の土師器製作技法を基礎に、これに回転台技法が導入される。」回転台土師器一類と、「在来の須恵器工人が陶土や燃料効率を改善し、生産面での合理化・省力化を図り、意図的に低火度酸化焔焼成の製品を仕上げる。」回転台土師器二類に分けた。(4) 本遺跡の第１群、第２群がそれぞれ橋本のいう回転台土師器一類、第二類に対応すると考えられる。

徳島県内で回転台土師器は、阿波国府跡、庄遺跡、名東遺跡から出土している。勝浦守康は、前記の遺跡の土器相について編年作業を試みている。(5) これを参考にすると、本遺跡の第１包含層出土の資料は、庄遺跡（徳大体育館地点）水路より新しく、庄遺跡（徳大体育館地点）土器溜りや三谷遺跡包含層に併行ないし若干古い様相を示す。資料が公表されていないものが多く十分な検討はできないが、第１包含層出土の土器群は、10 世紀後半の年代観が与えられよう。

註

(1) 庄遺跡（徳島大学蔵本団地地区体育館地点、兵営西内線地区）、南庄遺跡（南庄・南佐古線地区）、阿波国分寺跡、黒谷川宮ノ前遺跡（本書地点、四国縦貫自動車道地点）の４地点６遺跡。

(2) 本田総一郎　「箸の本」　1985

(3) 武田恭彰　「古代土器生産の一予察」　『古代吉備』第 11 集　1989　など

(4) 橋本久和　「畿内周辺の回転台土師器」　『考古学研究』第 38 巻第１号　1991

(5) 勝浦守康　「徳島県における中世土器様相」　『中世土器研究会　第 10 回研究集会報告資料』　1991

出土土器観察表

表2　第5～10層出土土器観察表

番号	機　種	法　量	特　徴・技　法	色　調	焼　成
5-1	瓦器　椀	口径　15.2cm 器高　4.6cm	・緩やかに内湾して立ち上がる。高台は断面三角形でしっかりしたもの。 ・外面指頭圧痕が口縁端部下1.5cmまで及ぶ。内面見込み部にループ状の暗文、口縁部にかけて平行方向の暗文が看取。口縁にココナデ。 ・和泉系瓦器	外面：淡灰色でロ縁部は黒色（重焼きに伴ういぶし） 内面：淡灰黄色	良好
5-3	黒色土器（B） 椀		・断面台形の貼りつけ高台。 ・外面幅2mm前後の水平方向のミガキ。高台外側は回転ヘラケナデ、内側は蛇目高台風の回転ヘラケズリ。 ・内面きわめて丁寧なヘラキガキ。	内外面とも黒色外面の一部に明黄褐色の地色を残す。	良好

表3　第1包含層出土土器観察表

番号	器　種	法　量	特　徴・技　法	色　調	焼　成
9-1	土師器　杯	口径　12.6cm 器高　3.8cm	・外底部回転ヘラ切り未調整。 ・体部丁寧なヨコナデ。 ・内外面とも丹塗り。 ・外底部に「楷本？」の墨書きあり。	内外面とも乳灰色の地に赤茶色の丹を塗布。	良好
9-2	土師器　杯	口径（復元） 12.1cm 器高　3.8cm	・外底部は回転ヘラ切り未調整。 ・体部内外面ともヨコナデ。 ・外底部に「大」＋1字（不明文字）の墨書あり。	内外面とも明黄褐色。	良好
9-3	土師器　皿	口径　10.6cm 器高　2.4cm	・「て」字状に段をもって屈折するロ縁をもつ皿に、わずかに外傾する高い高台がつく。 ・外底面にヘラ状工具の差し込み痕あり。 内底面は静止ナデを加える。 ・体部内外面ともヨコナデ。	内外面とも明るい茶褐色。	良好
9-4	土師器　皿	口径　10.7cm 器高　2.3cm	・ロ縁部は大きく外湾し、端部に水平方向に向く。「ハ」字状の高い高台。 ・内外面ともヨコナデ。内底面は静止ナデを加える。	内外面とも乳灰色	良好
9-5	土師器　杯	口径（復元） 12.5cm 器高　3.5cm	・外底部は回転ヘラ切り後、わずかに静止ナデを加える。 ・体部内外面ともヨコナデ。	淡灰色	良好

番号	器　種	法　量	技　法・特　徴	色　調	焼　成
9-6	土師器　杯		・底部は回転ヘラ切り。内面にヘラ状工具の掻き痕あり。	灰褐色	良好
9-7	土師器　杯	口径　11.6cm 器高　3.6cm	・外底面は回転ヘラ切り後、静止後のヘラ状工具差し込み痕あり。 ・体部は内外面ともヨコナデ。	明黄褐色	良好
9-8	土師器　杯	口径　11.7cm 器高　3.6cm	・外底面回転ヘラ切り未調整。 ・体部は内外面ともヨコナデ。内底面に一部静止ナデを加える。	淡灰黄色 （内面に墨痕が部分的に看取される。）	良好
9-9	土師器　杯	口径　12.5cm 器高　3.5cm	・外底面回転ヘラ切りのちナデ。ヘラ状工具の差し込み痕あり。 ・体部内外面ともヨコナデ。 ・内外面に丹塗り。	内外面に淡灰色丹塗り	良好
9-10	土師器　杯	口径　13.0cm 器高　3.2cm	・円盤状の底部に口縁部を積み上げ成形。 ・外底面回転ヘラケズのちナデ。 ・体部内外面ともヨコナデ。	明灰色 （口縁部に丹塗り）	良好 須恵器に近い焼上がり
9-11	土師器　皿	口径　12.2cm 器高　1.4cm	・底部と口縁部の間に段をもって外反しながら立ち上がる。 ・外底面回転ヘラ切り未調整、底部と口縁部の間に強いヨコナデ。 ・体部内外面ともヨコナデ。 ・内面に「－」の墨書あり。	淡灰褐色	良好
9-12	土師器　杯	口径　12.0cm 器高　2.8cm	・外底面回転ヘラ切り未調整。ヘラ状工具の差し込み痕あり。 ・体部内外面ともヨコナデ。 ・須恵器に近い精緻な焼き上がり。	暗灰褐色	良好 須恵器に近い焼き上がり
9-13	土師器　杯	口径　12.6cm 器高　3.3cm	・外底面回転ヘラ切り未調整。 ・体部内外面ともヨコナデ。 ・体部と底部の間の内面に指頭圧痕あり。	明灰褐色	良好
9-14	土師器　椀		・外底面回転ヘラ切り。断面「U」字状のしっかりした貼りつけ高台。 ・内面ヨコナデ。	淡灰黄色	
9-15	土師器　椀		・外底面に粘土紐痕跡を明瞭に残す。断面方形の貼りつけ高台。 ・外面ヘラケズリのちナデ。 ・内面ロクロナデ。	淡灰黄色	
9-16	瓦器　椀		・断面「U」字状のしっかりした貼りつけ高台。 ・外面ナデのち幅2㎜のミガキ。 ・内面幅3～3.5㎜の「井」状の暗文。	外面：淡黄褐色 内面：黒色	良好

番号	機　種	法　量	特　徴・技　法	色　調	焼　成
9-17	土師質　羽釜	口径（復元） 25.0cm	・口縁部は直立し、鍔は水平にしっかりとつく。（摂津型） ・外面口縁部及び鍔部はヨコナデ。鍔部端部ヨコハケ。鍔以下の体部に粘土紐積み上げ痕残り、ユビオサエとタテハケで調整。 ・内面横方向の板ナデ。	外面：淡黄褐色 内面：灰黄褐色	良好

表4　10k－19グリッド土器溜り出土土器観察表

番号	器　種	法　量	特　徴・技　法	色　調	焼　成
20-1	土師質　杯	口径　11.3cm 器高　2.6cm	・体部ヨコナデ。 ・底部静止ヘラ切り。	乳灰黄色	良好
20-2	土師質　杯	口径（復元） 12.0cm 器高　2.1cm	・体部ヨコナデ。 ・底部静止ヘラ切り。	乳灰黄色	やや不良
20-3	土師質　杯	口径　12.1cm 器高　2.5cm	・体部ヨコナデ。 ・底部静止ヘラ切り。	乳灰黄色	良好
20-4	土師質　杯	口径　11.8cm 器高　2.1cm	・体部ヨコナデ。 ・底部外面静止ヘラ切り、内面ユビオサエ	淡灰褐色	良好
20-5	土師質　杯	口径（復元） 12.1cm 器高　2.3cm	・体部ヨコナデ。 ・底部外面静止ヘラ切り、内面ユビオサエ	乳灰黄色	やや不良
20-6	土師質　杯	口径　12.4cm 器高　2.4cm	・体部ヨコナデ。 ・底部外面静止ヘラ切り、内面ユビオサエ	淡灰褐色	良好
20-7	土師質　杯	口径　12.4cm 器高　2.7cm	・体部ヨコナデ。 ・底部外面静止ヘラ切り、内面ユビオサエ。	乳灰黄色	良好

表5　上層（青灰色グライ層）出土遺物観察表

番号	器　種	法　量	特　徴・技　法	色　調	焼　成
21-1	備前焼　擂鉢	口径（復元） 29.0cm	・口縁部を上下に拡張し、端面を凹面に仕上げる。 ・外面ロクロナデ、内面に8条単位の放射状櫛描き条線。	暗赤褐色	良好
21-2	備前焼　擂鉢	底径（復元） 15.9cm	・外面ロクロナデ。内面に7条単位の放射状櫛描き条線。	暗赤褐色	良好
21-3	土師質 鍋脚部		・脚部ヘラケズリにより面取りして成形。	灰色	良好
21-4	土師質 鍋脚部		・脚部ヘラケズリにより面取りして成形。	暗灰色	良好
21-5	青磁　椀	口径（復元） 15.7cm	・龍泉窯系 ・丁寧なロクロナデ、暗緑色の釉を濃く施す。	暗緑色	良好
21-6	土師質　杯	口径　12.0cm 器高　3.4cm	・体部やや内湾し口縁部直線的に立ち上がる。 ・底部ヘラ切り、内外面ともヨコナデ	明茶褐色	良好
21-7	土師質　杯	口径（復元） 12.1cm 器高（復元） 2.8cm	・体部直線的に立ち上がり、口縁部わずかに外反する。	茶褐色	やや不良
21-8	土師質　皿	底径（復元） 6.9cm	・円盤状の底部 ・底部回転糸切り。	暗灰褐色	良好
21-9	瓦器　椀	口径　15.6cm 器高　5.1cm	・体部内湾。断面「U」字状の貼り付け高台。 ・外面口縁部を除き密なユビオサエのち、雑なミガキ。 ・内面渦巻状の暗文、見込み部に往復の平行線状の暗文。	黒灰色	良好
21-10	瓦器　椀	口径　14.8cm 器高　4.0cm	・体部内湾。断面三角形の低い貼り付け高台。 ・外面体部下半にユビオサエ。内面同心円状の粗い暗文、見込み部に3回転のループ状の暗文。	黒灰色	良好

写　真　図　版

（上） 第Ⅰ次調査左岸側調査風景　（下） 第Ⅰ次調査左岸側完成掘状況

PL. 2

（上、下） 第Ⅰ次調査第１包含層土器出土状況

（上、下） 第Ⅰ次調査第１包含層土器出土状況

PL. 4

（上、中、下） 第Ⅰ次調査第１包含層上層斎串出土状況

（上、下） 第Ⅰ次調査第１包含層斎串出土状況

PL. 6

（上） 第Ⅰ次調査第１包含層鉾形出土状況
（下） 第Ⅰ次調査第１包含層斎串出土状況

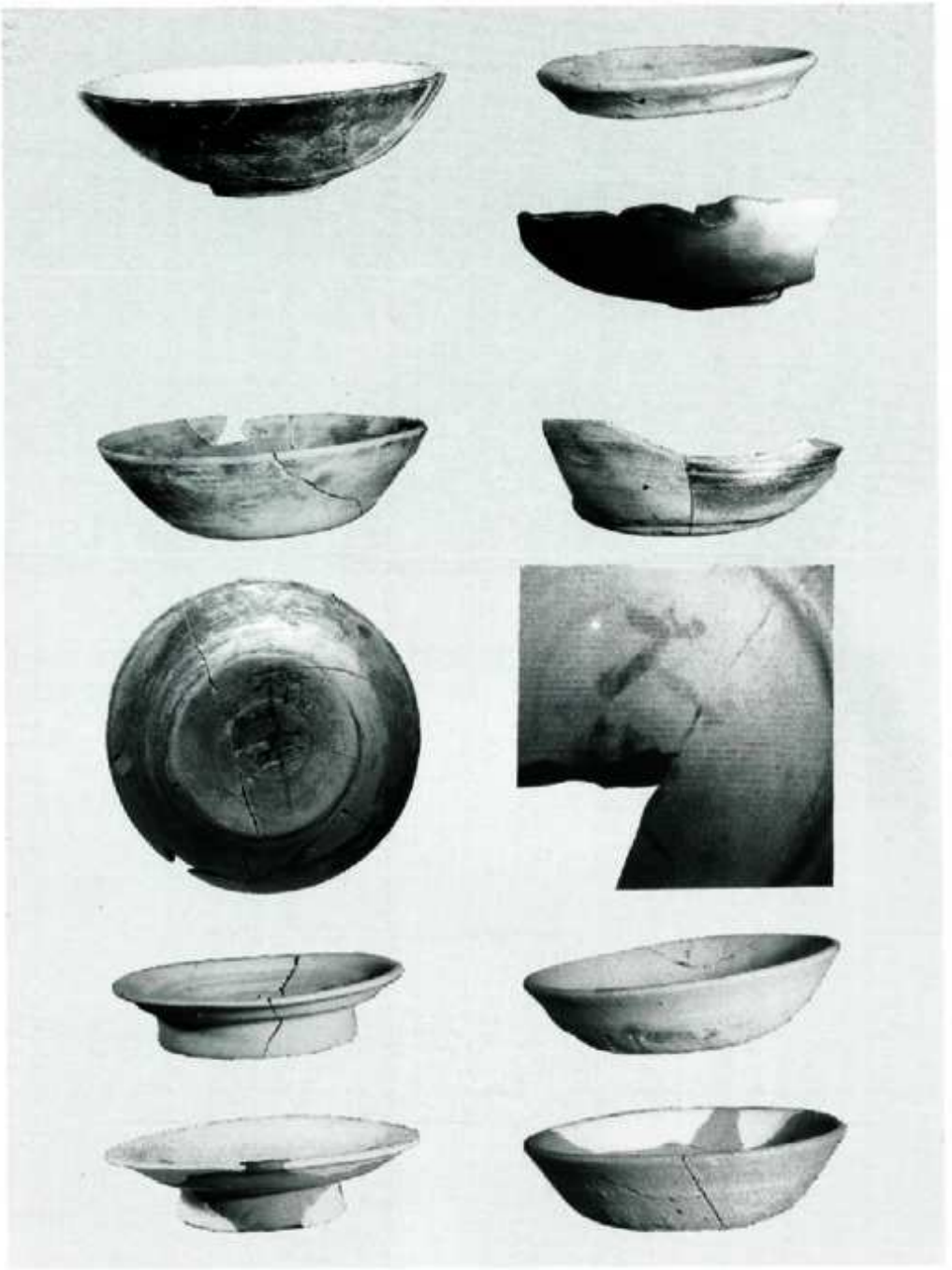
（上、中） 第Ⅰ次調査第1包含層斎串出土状況
（下） 第Ⅰ次調査第2包含層棒状祭祀具出土状況

PL. 8

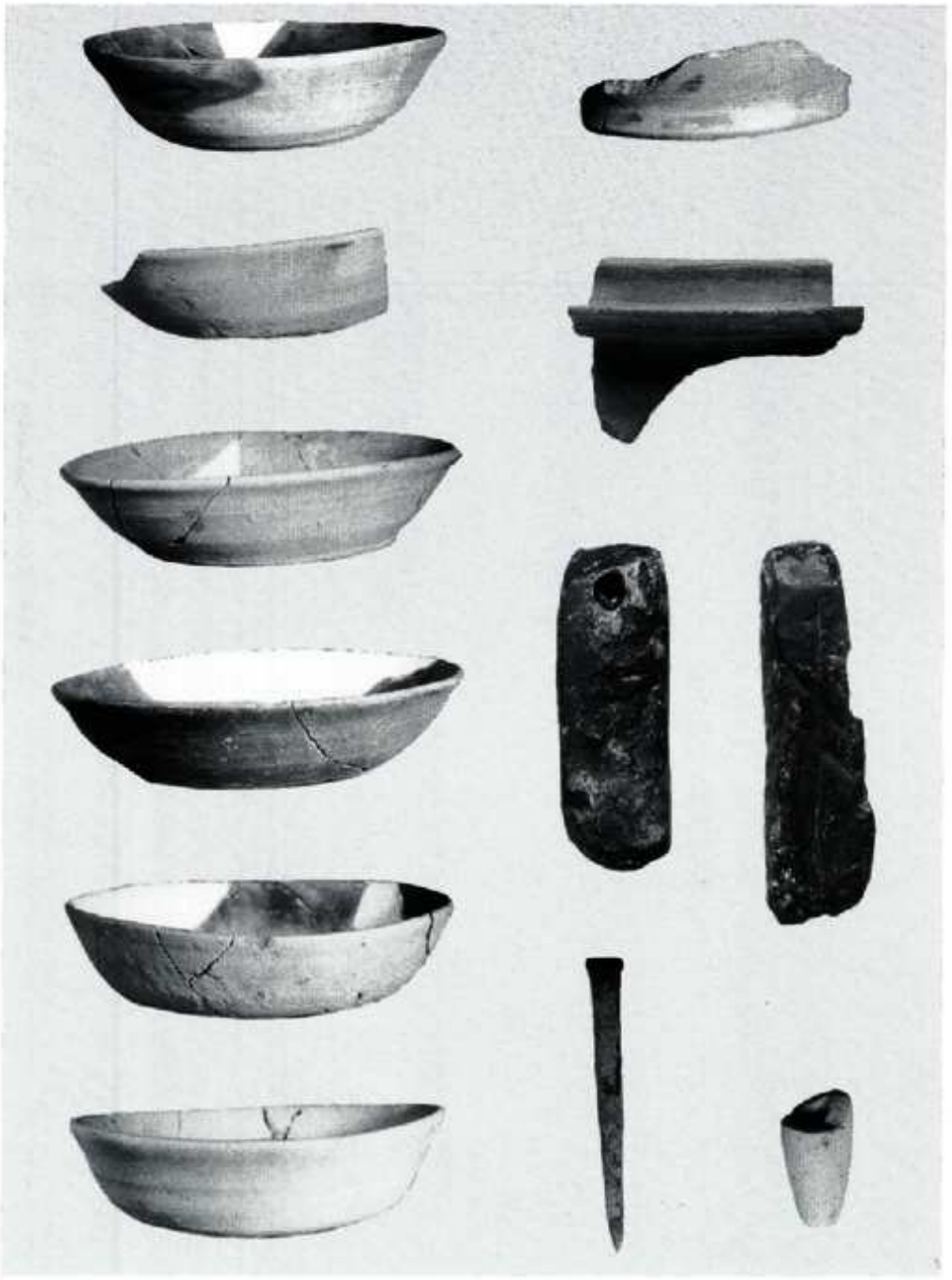
（上） 第Ⅰ次調査第２包含層棒状祭祀具出土状況
（下） 第Ⅰ次調査第２包含層櫂状木製品出土状況

（上、下） 第Ⅰ次調査第2包含層曲物出土状況

PL. 10

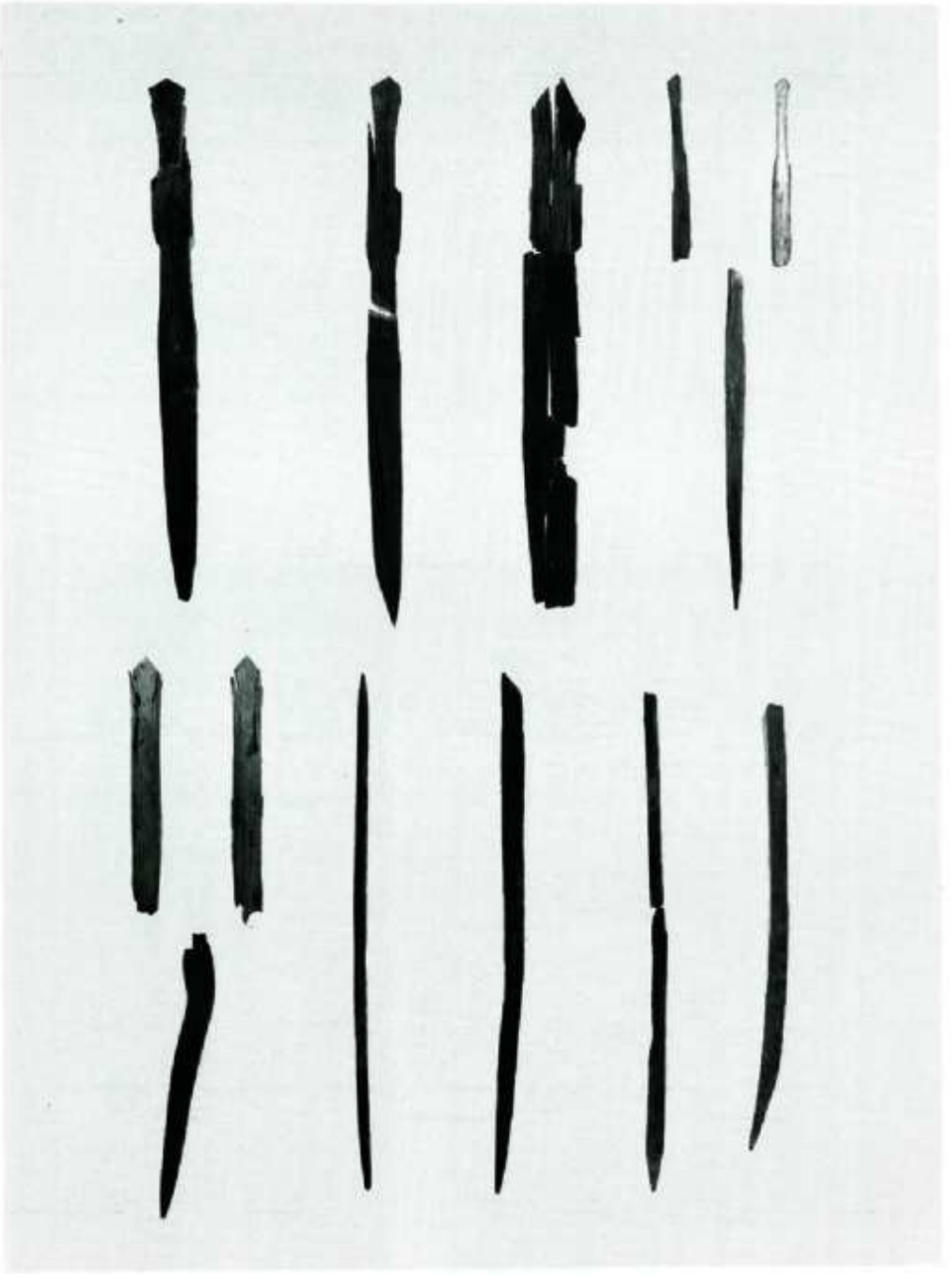


第 I 次調査出土土器



第Ⅰ次調査出土土器、石器、鉄器

PL. 12

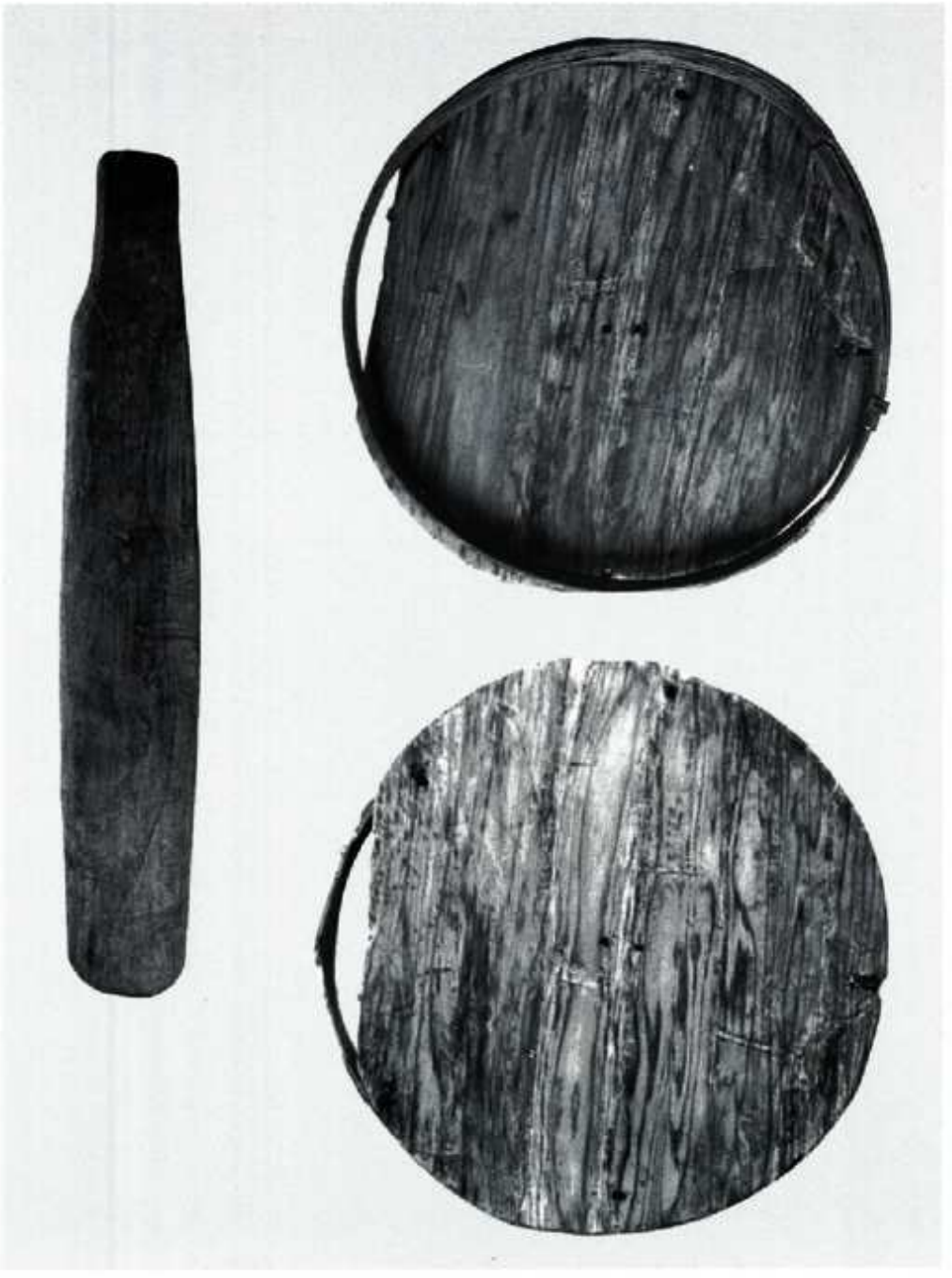


第Ⅰ次調査第1包含層出土木製祭祀具

第Ⅰ次調査第1包含層出土人形、縄、檜扇
（左：通常　右：赤外線カメラ使用）

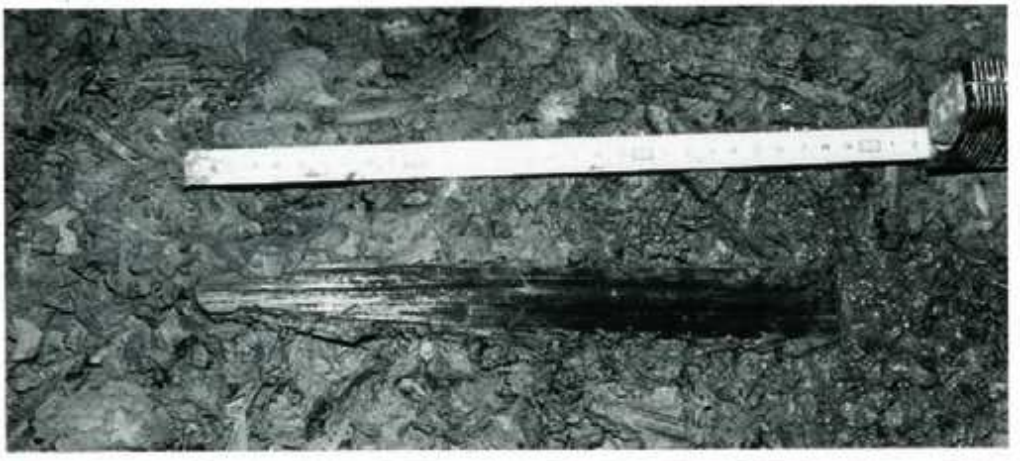
PL. 14

第Ⅰ次調査第2包含層、左岸側試掘坑出土木製祭祀具

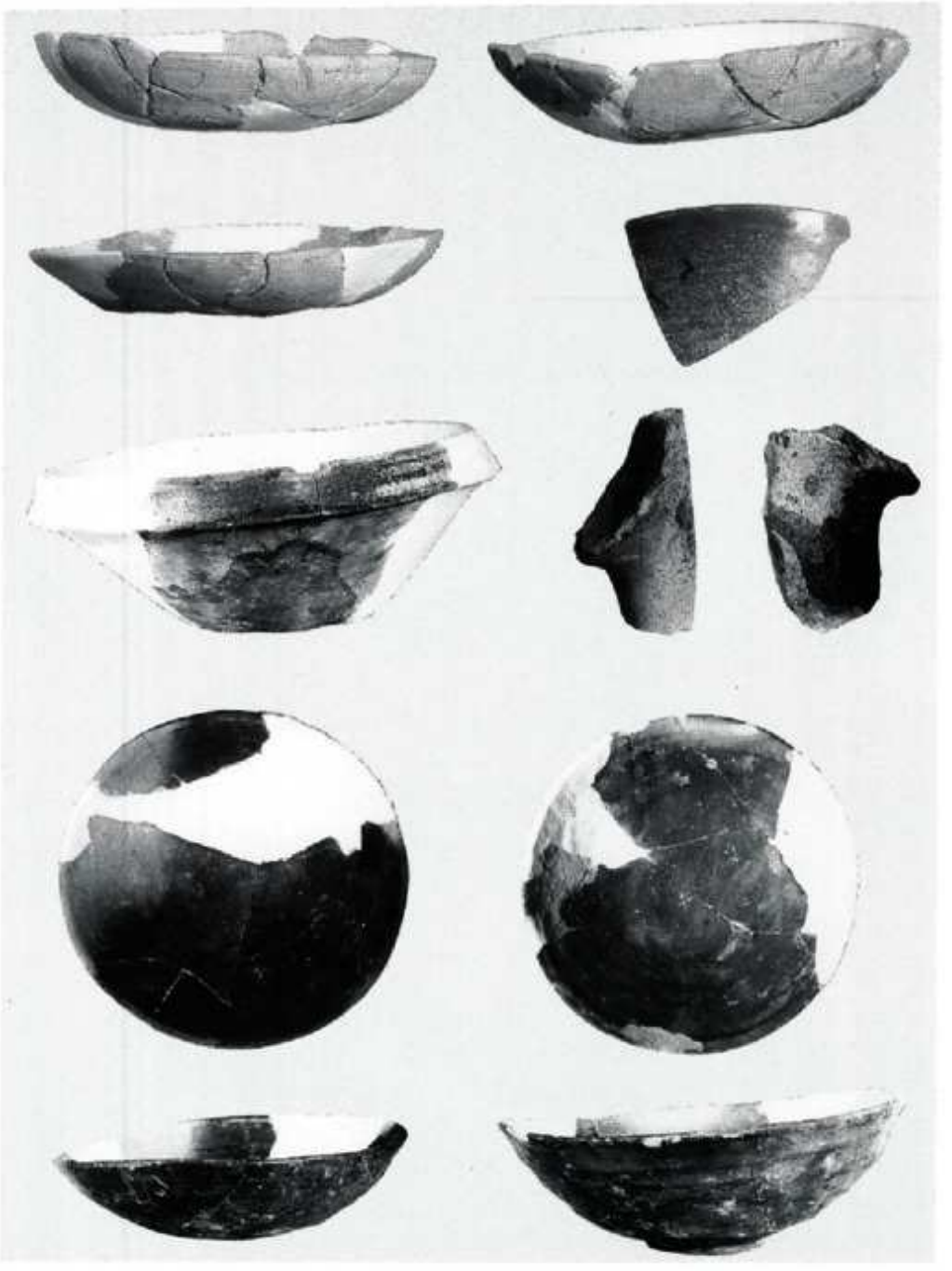


第Ⅰ次調査第2包含層出土櫂状木製品、曲物

PL. 16



（上） 第Ⅱ次調査調査区全景　（中） 人形出土状況
（下） 横櫛出土状況



第II次調査上層出土土器

黒谷川宮ノ前遺跡
編集　徳島県教育委員会
発行　徳島市万代町1丁目1番地
印刷　㈱ありあけ印刷
平成5年3月31日発行